Sanctuary ～遠くの空～

エフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓａｎｃｔｕａｒｙ　～遠くの空～

【Ｎコード】
Ｎ４９２２Ｖ

【作者名】
エフ

【あらすじ】
消え行く思い出。
限られた時間。
そんな中、２人の少女と出会う。
（本編８日＋他１編で構成。全体のボリュームは映画一本分を想定）

それは突然空から降ってきた

願いが叶う。
嘘か真か定かではないが、そんな言い伝えを持つ大樹がこの町にはある。
まるで世界を切り裂くかのごとく圧倒的な存在感を示しながら、町外れの小高い丘の山頂にそれは聳えていた。
いつものように俺はその大樹の前に立ち、空を仰ぐ。
一本の大樹により貫かれた天が視界いっぱいに広がる。
幾度となく目にしてきた光景。いつもと変わらない何の変哲もない光景。……のはずだった。
妙な違和感。何かが違う。
心臓の鼓動が高まる。
これは胸騒ぎか？
……いや、殺気と言った方が適切かもしれない。
敢えて言葉にして表現するならば、空から降ってきた得体の知れない怪物によって俺の体が食いちぎられてしまうような、そんな感じ。
心臓の鼓動はさらに激しさを増す。
この殺気は一体どこから来ている？
辺りを見渡す。
前か。後ろか。いや、違う。

――上だ。

我が目を疑った。
人間が空から降ってきた。
時間にして、わずか一秒足らずのできごと。避けることも受け止めることもできなかった。
轟音が辺りに響き渡る。砂煙が一面に舞い、視界が塞がれる。

「ご、ごめんなさいっ、大丈夫ですか？」

空から降ってきた『何か』は、俺の体を押し潰しながらそう言った。

◆□◆□◆□◆□◆□

徐々にその顔が明らかになっていく。

女の子だった。腰まで伸びた少し茶色がかった黒髪が風に靡いた。

「イテテ……とりあえず、俺を解放してくれ」

「あ…、ごめんなさいっ。すぐにどきますっ」

慌てて立ち上がり身をどけると、ものすごく申し訳なさそうな顔をしながら俺の方を見つめてくる。

そんな表情を見せつけられては、とても責める気にはなれない。

一瞬でも気を抜けば今すぐにでも昇天してしまいそうなほどの痛みが全身を駆け巡るが、ひたすら気力で押さえ込み、満面の笑みで体を起こす。なんて紳士な俺！

「いやぁ、突然空から降ってきたからびっくりしたよ。まるで漫画みたいだな」

「ごめんなさい……足を踏み外してしまいました」

足を踏み外した……？

ああ、そういうことか。

今俺らがいるこの丘にはもう一つ、別の丘が隣接して連なっている。

そこは人による手が長いこと施されていない。特に目を惹くものは何もなく、中に人が立ち入ることが滅多にないためだ。すっかり荒れ果ててしまって、いわゆる吹き抜けが四方八方に点在している。

辺りをよく見ていないと、このように隣の丘まで落下してしまう危険性があるのだ。
とは言え、よほどのおっちょこっちょいでもない限り、そんな目にあうはずもないが……。２０年以上この町で暮らしてきて、そんな事例など一度も耳にしたことがない。
きっとこの子は超が付くほどドジなのだろうと思った。いわゆるドジっ娘ってやつ？
そう考えたら笑いがこみ上げてきた。思わず、クスっと笑い声を漏らす。

「何を笑っているのですか？」
「いや、一人言」

まさか君がドジだから笑ってしまったなんて言えるはずもない。

◆□◆□◆□◆□◆□

「この木のこと、あなたは知っているのですか？」
「ああ、知っているも何も毎日こうして見に来ている」
「私もこの木知っています。懐かしい……」

俺がこの木と出会ったのはいつの日のことだっただろうか……。
記憶の糸を手繰る。
あの日、俺は泣いていた。なんで泣いていたのかは、今となっては思い出すことはできない。
泣きながら、町を彷徨い続けた。すがる相手が欲しかった。やがて辿り着いた場所が、ここだった。
忽然と目の前に立ちはだかる一本の大樹。
世界が切り裂かれて見えた。
呆然とその場に立ち尽くし、ふと見上げた空は一面の青で、一本の

大樹がそれを無慈悲なまでに貫いていた。
圧巻だった。
その壮大なスケールに、あっという間に呑みこまれてしまった。
言葉など何も出てこない。気がつくと、溢れ出ていた涙は止まっていた。
これが最初の記憶である。
以来、毎日のようにこの場所を訪れるようになった。
俺は誰かと一緒にいるより、一人でいる方が性に合っていたので、
こうして日々、空を見上げながらいろいろなことを考えた。
この広大な宇宙の中で、俺という存在はいかにちっぽけなもんだと
毎日のように思い知らされた。
大人になった今でも、たびたびこうしてこの場を訪れている。
この日常がいつまでも続くと思っていた。
だが唐突に終わりは訪れることになる。
ショッキングなニュースを耳にした。
役場が住民の反対を押し切って、ここ一帯を宅地開発することを決めたのだ。つまり、ここにある木々は全て切り倒される。
嘘だと思いたかった。だが、これが現実なのだ。
今日から数えて、ちょうど7日後だ。
あと7日過ぎれば、俺の思い出は泡沫の如く消えてなくなってしまう。
だから、その前に目に焼き付けておきたいと思った。
そう思って、今日もここを訪れたわけだ。
そしたら空から女の子が降ってきて……今に至るわけである。

◆□◆□◆□◆□◆□

「えぇっっ、この木、切り倒されちゃうんですかっっ???」

たいそう驚いた様子で叫ぶ。

もしかして、彼女はこの町の人間ではないのだろうか。
ちっぽけな町だ。何か目新しいことが起きれば、瞬く間に噂は広がる。
彼女がこの町の人間なら、何らかの形で耳にしていてもいいはずだ。
または、かつてこの町で過ごしていたことがあって、今はどこか遠くの町に住んでいるけれども、懐かしい思い出に心惹かれて遥々こうしてここまでやってきたということも考えられる。いや、むしろそう考えた方がしっくりくるかも……。

「ああ、そうみたいだな。宅地にして、ニュータウンとやらを作るんだとよ」
「でも、そうしたら自然が失われてしまうじゃないですか！誰も反対運動を起こさないんですかっっ」

語気を荒立てる。
その素振りから、きっと彼女もこの木に思い入れがあるのだろうということを悟った。

「ああ、反対したさ。だが、無駄だったよ。一介の庶民が町役場の決定に逆らうことなどできるはずがないさ。……それに奴らにも大儀名分が無いわけでもない。ほら、ここド田舎だろ。おかげで、だいぶ過疎化が進んでしまってさ。苦肉の策なんだろうな、きっと。こうでもして人を呼び込まないと、やってけないんだろうよ」
「でも…、だからと言って……っ！」

そう言い掛けて黙ってしまった。顔に悔しさが滲んでいた。

◆□◆□◆□◆□◆□

日が暮れようとしていた。そろそろお開きの時間だろう。

彼女を丘の下まで見送る。
一向に彼女の顔から陰りは消えなかった。
それも仕方がないか……。俺だって、最初にそのことを聞いたときは彼女と同じことを思ったからな…。
今はどこか遠くの町に住んでいるとは言え、彼女にとってここは故郷。思い入れだって、それになりにあるだろう。受け入れるには、もう少し時間がかかるだろうな……。

「今日はありがとうございました。あと、ごめんなさいね……私のせいで、ケガさせちゃって」

しつこいぐらいに謝罪を繰り返す。
もうそんなことどうだっていいのに。律儀な子なんだなと思う。

「そうだ、まだ名前聞いてなかったよね。何て言うんだ？」
「え…、名前ですか……私の？」
「ああ。君の」

気のせいだろうか。一瞬戸惑ったかのように見えた。

「えっと…繭。繭って言います。繭って呼んでください！」

俺の思い出が消えてなくなる7日前、思わぬ出会いをした。

セナ―1

昨日会った女の子。確か名前は繭と言ったっけ。
思えば、不思議な子だった。
なんでだろうな。昨日会ったばかりなのに、ずっと昔から知っていたかのように思えてしまような、そんな懐かしい雰囲気を彼女は漂わせていた。
いや、一目惚れとか、そんなんではなくて……。
そして今日もあの場所へと向かう。
もしかしたら繭にまた会えるんじゃないかと、内心期待しながら。
――到着。
期待は当たった。
遠くの方に見える人影。目を凝らして、それを見ると、繭が手を振っているのが見えた。
俺も、すかさず手を振り返すと、駆け足で繭のいるところへ向かう。

「また会いましたね」
「ああ、また会ったな」

軽く挨拶を交わす。
繭も俺が来るのを待っててていてくれたんだろうか。
だとしたら、少し嬉しい。

「敬語とか使わなくていいよ。顔見知りなんだから」
「じゃあ、これからは友達と話すときのような口調で喋らせてもらうね」

◆□◆□◆□◆□◆□

雲ひとつない青空。
どこからともなく、小鳥の囀る声が聞こえてくる。
吹いた風が顔を撫でた。

「ところでさ、毎日ここ、来てるの？」
「ああ、ここのところは毎日だな。今は夏休みで暇もあるしな。それに……」
「それに？」
「今しかないだろ。あと6日たったら、消えてなくなっちゃうんだから」
「……そっか。思い出の場所なんだね」
「いや、思い出の場所というより、聖域だな、ここは」
「どういうこと？」
「たとえば何か嫌なことがあったとするだろ？そんなとき、この場所に来ると気持ちが安らぐんだ。繭にもあるんじゃないかな？そんな場所」
「うん、あるかな……」
「なら、なんとく分かってもらえるんじゃないかと思う」
「うん」

木の幹に腰を掛け、会話を続ける。

「そういや、繭の首に掛けてるこれ、何だ？」

見たところ、首飾りのようだ。
そういえば、昨日もこれと同じものを首に掛けていたことを思い出す。
真ん中の辺りに石らしきものが埋め込んであり、光沢を放っている。
それに触れようと、手を伸ばしたそのときだった。

「――触らないで！」

繭に思いっきり手で弾かれた。

「ご、ごめん。綺麗だったから……」

「……わたしもごめんなさい。突然叩いたりして」

大切そうにその首飾りを胸に抱きながら、続ける。

「この首飾りは、わたしにとっての大切な大切な宝物なの。昔にね、友達がわたしのために作ってくれて、プレゼントしてくれたの」

あぁ、なるほど……。だから、あんなすごい剣幕で拒絶したわけか。納得。

「ところで繭。こうして今日もこの場所に来ているってことは、この場所に何かしらの愛着があるからなんだと思うんだけど、どうなんだ？」

「愛着かぁ……うん。あるわ。ずっと、ずっと昔にね、この場所で願いを託したの」

「願い？」

「うん、願い。笑っちゃうくらい遠い昔の話だけどね」

昔ということは、子供の頃のことだろうか。

嘘か真か、ここには古より願いが叶うとの言い伝えがある。

おそらく迷信のような類のものだとは思うが、子供なら真に受けるだろう。

俺もそうだった。子供は純粋だからな。繭もきっと、同じように思って願を掛けたのだろう。

「願いか。そういうのもいいよな。夢があってさ」
「あ、バカにした？」
「バカになんかしてないよ。どんな願いを託したんだ？」
「絶対に笑うから言わないっ」
「笑わないよ」
「本当に？」
「本当に」

一呼吸置いて言う。

「……ここに生きている皆が、幸せになれますようにって」

繭が一瞬、夢見る少女のように見えた。
おとぎの国のお姫様。
自然と笑いがこみ上げてくる。

「……プッ」
「あ～っ、やっぱり笑った！」
「ごめん！つい」
「わたしのこと、バカにしてるでしょ！年下だと思ってっ！」
「バカになんかしてないって」
「絶対してる！」
「なあ、繭」

一つ気になったことがあった。

「なに？」
「今何歳だ？」
「17歳だけど……それが何か？」
「いや、なんでもない。17歳にしては雰囲気が大人びてるなと思

って」
「そう……かしら？」
繭の顔に笑顔が戻った。
知らず知らずのうちにご機嫌を取ることに成功したらしい。
◆□◆□◆□◆□◆□
「――――！」
思わず身構える。
「どうしたの？」
「感じるんだ……ただならぬ気配を」

どこだ。
横か。前か。
いや……上だ。
空を見上げる。
人が降ってきた。
少女だ。今度は、繭よりもずっと年下の。

『おいおい、またかよ。今度はお手柔らかに頼むぜ……』

そう呟く暇もなく。
避けることも受け止めることもできずに、またもや俺はその下敷きとなった。
轟音が辺りに響き渡り、砂煙が視界を覆い隠す。
「いててててて……」

今度は肋骨６本は逝った気がする。

「いったぁ……、もうちゃんと受け止めてよねっ」

くそっ……なんなんだ。こいつは……っ！

人を下敷きにしておいて言う言葉かっ。

このガキには、躾というものがなっていないのか。

「お前なぁ……」

「ん？おにーさん、もしかして痛いの？」

「めちゃくちゃ痛いわっ！まずはな、こういう時は、ごめんなさいって言うんだ」

「えへへ～ごめんね～」

だめだ。まるっきし反省していない。頭をがっくりと落とす。

「このおにーさん、繭の友達～？」

がっくりと落としたその頭の上に手をポンポンと置きながら、少女が言う。

実に不愉快だ。

「も、もうセナったら！」

なるほど。このガキはセナというのか。

「大丈夫だよ～、あまり痛がってそうに見えないしっ」

「めちゃくちゃ痛いんですけど……できたら救急車呼んでもらいたい」

わざと苦しんでみせる。
だが、セナは全く動じず、それどころかゲラゲラと笑っていやがる。
クソっ、なんというガキだっ

「ちょ、ちょっと……大丈夫？」

繭が駆け寄ってきて、体をさすってくれる。
さすが繭。慈愛に満ちているぜ。

「ところでこいつ、繭の知り合いみたいだけど」
「あ、うん。この子はセナ。お転婆なところもあるけど、悪気がある
るわけじゃないから、どうか大目に見てあげて」
「セナです、よろしくっ」

元気良く自己紹介をしてくる。

「しっかし、とんだ能天気娘だな。このガキは」
「ちょっと、おにーさん！ガキとは何よっ、ガキとは！」

どうやら、ガキ呼ばわりされたことが心外のようだ。
よし、だったらもっと言ってやろう。

「お前なんか、ガキで充分だっ！おい、ガキ」
「ひ、ひどいよぉ……えぐっえぐっ」

繭の胸に飛び込んで、泣き出す。

「おいおい、何も泣かなくても……」
「えへへ～嘘泣き～」

……くそ、またはめられた。

「なあ、お前セナって言ったっけ。お前も吹き抜けから落ちたのか」
「そうそう！びっくりしたよ！いきなり穴が開いててさ！超危険だよね！立て札でも立てるべきだよ！」

希少種が2人。
この2人には、おっちょこコンビの称号を送りたい。

「実は、繭も昨日そこから落ちたんだ」
「もしかして、そのときもおにーさんが下に？」
「そうだ。俺がクッションになった。死ぬかと思った」
「あはは～、運が悪いねっおにーさん」
「バカ。俺にとっては運が悪かったが、お前らにとっては不幸中の幸いだったんだぞ！俺が下にいなけりゃ、2人とも木っ端微塵であの世行きだったんだからな！」

恩を売るいい機会なので、少し誇張気味に言っておく。

「だから、俺に感謝しなさい」
「ありがとう、本当に……」

繭が瞳をうるうるさせながらお礼を述べる。
まさか、こんなハッタリが通用するほど純粋な娘だったとは！

「そうかな～。おにーさんの体、クッションというより鉄板みたいだったけど？あっちの草むらに落ちた方が、かえってダメージ少なくて済んだんじゃない？」

セナが呆気らかんとして言う。
だめだ、こいつには全く効果なかった。
馬の耳に念仏。期待した俺がバカだったぜ……
「えへへ～本当に鉄板みたいだったよ～」
「くそぅ！」
思わずその場にうなだれこむ。
「どーしたの？おにーさん」
セナが近寄ってくる。
「だめだ、お前には失望した……」
「あはは～、おにいさんって面白いんだね～」
「おもしろかないわいっ！」
そのやりとりを見ていた繭がクスクスと笑い出す。
「どうした？鼻くそでも付いていたか」
「いえ、二人とも仲良いんだなって思って」
「いや、それは誤解だぞ。こう見えて実は殺し合いをしていたんだ。
そう、ここで会ったが百年目――！」
「あはは～、何それ～」
セナが笑う。
「いつかお前の寝首をかいてやるっ！覚悟しとけ！」
「やっぱり、二人仲良いよ～」

◆□◆□◆□◆□◆□

「セナは、おにーさんと仲良くなりたいよ。友達になろっ」

セナが手を差し出してくる。握手しろということか。

「断るっ」

「え～、なんで～」

「セナは、子供すぎるからだ」

「子供じゃないよっ、こう見えても大人なんだからっ」

またまた何を言い出す。

「いや、とてもじゃないが大人には見えんぞ」

「えぇ～、本当に大人だよ～」

『自称』大人ということか。子供にしか見えないのだが。

「なあ繭。こいつは繭の妹か？やけに慣れ慣れしいが」

「友達だよ。でも、この子の方が年上だよ」

またまた、繭まで何を言ってやがる。

「んなわけないだろっ。どこをどう見たら、こいつがお前より年上で、お前がこいつより年下になるってんだ。2人して俺をからかってるのか」

「本当だよ～」

セナが言う。

「うん、信じられないかもしれないけど、本当だよ」
繭も同じことを言う。
「マジだったのか……」
再度、その場にうな垂れる。
「驚くのはわかるけど、うな垂れなくても……」
繭が近寄ってきて俺を慰める。
「俺はこれから先、何を信じたらいいのか分からない……っ」
魂の叫び。いや、魂の呟き。
「なあ、繭。お前は確か17歳だったよな？」
「うん。そうだよ」
「セナ、お前は？」
「内緒っ」
そうきたか。
「レディーに年齢なんて聞くものじゃないよ！おにーさん！」
レディーっておい……。
「なあ、繭。こいつは何歳なんだ？」
「さぁ、私もよく分からないわ。でも、私より年上であることは確

実よ」
「ううむ、、意味深な……。一体2人はどういう関係なんだ」
「ただの友達だよ～」とセナ
「うん、お友達」と繭。

いっそう訳が分からなくなった。

「まるでガリバーになって小人の星に来たときのような心境だぜ……」
「例えがよく分からないよ～」
「俺にとっては、それほどアンビリバボーな出来事だったというわけだ」
「意外に、肝っ玉が小さいんだねっ」

えっへんと言った感じで、言ってのけるセナ。

「お前に言われたかないわっ」

そう突っ込みを入れ、体を起こす。

「ねぇねぇ。ところでさ、おにーさん」
「なんだ？」
「おにーさん、地元の人？」
「ああ」
「じゃあさ、この辺案内してよっ」
「面倒くさいから嫌だ」
「おねがい～」
「繭と2人で行けばいいだろ」
「繭も、久しぶりにこの街に戻ってきたばかりで、よく分からないんだってさ。だから、おにーさん、お願いっ」

まあ、ここまで頼まれたら、仕方がない。俺の生まれ育った町だからな。

「しょうがないな。案内してやるよ。付いてこい」
「やった～」

きゃっきゃと喜ぶセナ。

「え？2人とも、下に行くの？」
「ああ。セナがどうしても行きたいって言うからな」
「じゃあさ……私も行っていいかな？」
「ああ、いいぜ」
「やったっ！」

繭もセナと一緒に子供のように喜ぶ。
案外この2人、波長が合うのかもしれない……。

セナ―2

丘を降り、町へと繰り出す。

「すご～い。見たことないお店ばっか～」

好奇心を剥き出しにしながら、辺りをきょろきょろと見渡すセナ。

「へ～、すっごい都会だねー」

セナと同じく、瞳をきらきらと輝かせながら辺りを見渡す繭。
見た目では繭の方がお姉さんだが、好奇心が旺盛という点ではこの2人、あまり変わりがないな。

「いや、都会というほどでもないと思うぞ」
「そうかな？」
「ただの寂れた商店街だ。こう見えても昔はもっと活気があったんだぜ」
「そう？今でも十分、活気あると思うよ」

いまいち調子が合わない。

「繭には一度、最盛期のころを見せてやりたいぜ。こんなもんの比ではないぞ？それはそれはもう足の踏み場もないほどだった」

というのは少し大げさだが。

「へえ、そうだったんだ。ずっと人里離れた山奥に住んでいたから、ちょっと想像がつかないなあ」

まあ、ここも人里離れた山奥だと思うが、あえて突っ込みは入れない。
きっと、人の多い場所にあまり慣れていないので、いまいち実感が沸かないのだろう。

「どこに住んでいたんだ？」
「内緒」

あっさりと撥ね退けられた。

「教えてくれたっていいだろ」
「内緒っ。また笑われたら嫌だもんっ」

しかし、まあ、繭の出身地といい、セナとの関係といい、こいつらには本当に謎が多いな……。
良からぬ予感が脳裏を過ぎる。
もしやこいつら……、俺を暗殺すべく密かに派遣されてやってきたスナイパーじゃあるまいな。

「お前、実は特技が人殺しだろ」
「え？え？どうして？？」

思いもよらない一言に、動揺する繭。
いや、ここは受けを狙ったつもりだったんだが……そんな深刻な顔をされてもな。

「いや、なんでもない」

まあ、いい。今度機会を見て、それとなく聞き出してみよう。

◆□◆□◆□◆□◆□

セナの方に目をやると、きゃっきゃっとはしゃぎながら、辺りを行ったり来たりしている。
行き交う通行人に体当たりを繰り返しつつ……。なんともまあ、迷惑千万なことを。

「おいおい、あまりはしゃぐなよ」
「だって、楽しいんだもおん」

一向に注意を聞き入れる素振りはない。

「きっとセナ、こういう活気の溢れたところに来るの初めてだから、なにもかもが目新しいのよ」

世間知らずの妹をフォローするかのように繭が言う。

「おまえら、山篭りでもしていたのか？」
「そんなわけじゃないけど」

繭が笑みを浮かべる。
と、そのときだった。

「あ！」

セナが思いっきりずっこけた。

「おいおい、だから言っただろ」

大きく擦り剥いたようで、膝小僧からは血がぽたぽたと滴り落ちている。
その場にしゃがみこみ泣き出すセナ。
「だ、大丈夫？」
俺の横で、その一部始終を見ていた繭がセナのもとに駆け寄る。
「あー……擦りむいちゃったね。でも、大丈夫。すぐに治るよ」
「痛いよ、痛いよ……」
繭に抱きつき、嗚咽を漏らすセナ。
「痛くないよ、大丈夫だよ」と、なだめながら、やさしく介抱する繭。
傍目では、仲の良い姉妹そのもので、なんとも微笑ましい。
「なあ、繭」
「何？」
「おまえら、実はやっぱり姉妹じゃないのか？」
「どうして？」
「どうみても繭がお姉さんにしか見えないんだ。そう。出来の悪い妹のために尽くす、やさしい姉」
お世辞ではなく、純粋にそう思った。
「セナの方が年上だよっ。それにセナ、出来が悪くないしっ」
セナが横から口を挟んでくる。涙目で。
「しっかし、どうも腑に落ちんなあ……」

巷で言われている七不思議より、こいつらの関係の方がよっぽど七不思議だと俺は思った。

◆□◆□◆□◆□◆□

「いっぱいお店が並んでるね～」

「ああ。そりゃ、商店街だからな」

セナが、ある建物の前で立ち止まり、指を指す。

「これは何～？」

「古本屋だ」

だが、今では出入りする客はほとんどいない。

中を覗き込む。

案の定、閑古鳥が鳴いていた。

◆□◆□◆□◆□◆□

「じゃあ、この変な形した建物は？？」

別の建物の前で立ち止まり、訊ねる。

俺にもよく分からない。

どうやら、ここは店ではなく、民家のようだが。

見ると、日本刀を意匠したオブジェらしきものが門の前に据え付けられている。そして、あやしげな家紋。どうみても、これは……

「関わらない方がいい。行くぞ」

「え～何、何～」

「バ、バカっ、やめろ！」

門の取っ手に手を掛けようとしていたセナの首根っこを捕まえて、その場から立ち去る。そのときの衝撃で取っ手が折れて地面に落ちたようだが気にしない。命の方が大切だからだ。

◆□◆□◆□◆□◆□

「繭。後ろを見てくれ。追っ手はいないだろうな？」

「追っ手？いないよ？」

「よかった。あやうくベンツで連れ去られて海の藻屑になるところだったぜ」

一安心。

「ねえねえ。この建物は？」

セナが、今度は一風変わった洋風の建物を指差している。

「これは、喫茶店だな」

「喫茶店？何する場所？」

そんなことも知らんのか、こいつは。

「そうだな……。飲み食いしながら、楽しく談笑する場所だ」

「へー、入っていい？」

「だめ」

「どうして？」

「金がかかるから。……っておい、勝手に入るな！」

引き止める暇もなく、勝手に中へと入っていくセナ。
来客を告げる鐘の音が鳴り響いた。

「あらあら、入っちゃったね……どうする？」
「しゃあないな。俺らも入ろう」

くそっ、ここで無駄金を使う羽目になろうとは。
財布の中身をチェックする。

「ごめんなさいね……」
なぜか繭が謝った。

「まあ、気にするな」

◆□◆□◆□◆□◆□

「いらっしゃいませー」

周囲を見渡す。
セナが、一番奥の席から、こっちこっちと手招きをしている。

「ったく、あのバカ」

そう呟き、手招きする方向へ向かう。

「えへへっ、特等席！」

えっへんといった様子で腰掛けている。

「お前。もちろん金は持ってるんだろうな？」
「ないよっ、おにーさんの奢りっ」
「このバカっ」

本当に躾けのなってないガキだ。
一度こいつの親の顔が見てみたいもんだ。

「まあまあ」

繭に、なだめられる。
一方でセナは無邪気に笑みを浮かべている。
なんともまあ、幸せなやつだ。
俺は、ある意味こいつが羨ましい。いっそのこと、世俗を捨てて、このような脳天気な人生を送ってみたいもんだ。
座席に腰掛けると同時にウェイトレスが、オーダーを取りに来た。
テーブルにお冷が３つ置かれる。

「ご注文は、何になさいますか？」

この際、何だっていいだろう。

「クリームソーダ２つ」

繭とセナの分だ。俺は水でいい。

「かしこまりましたー」

やたらと威勢のいい掛け声が店内に響いた。

「ふぅ……」

「おにーさん、もう疲れたの？」
「あぁ、誰かさんのおかげでな」
「誰かさんって誰？」
「自分の胸に聞いてみろ」

セナが、訝しげに自分の胸をじろじろと見つめる。
そして暫しの沈黙の後、何を思ったのか、顔を真っ赤に染めて立ち上がり……

「おにーさん、いっやらっし！」

心にもないことを言い放った。

「アホ！お前には比喩が分からんのかっ」

一体どんな想像をしていたんだ……。
横では、繭がクスクスと微笑みを浮かべていた。

「ほら見ろ。繭に笑われてしまった」
「おにーさんがエッチなこと言うからだよっ」

おいおい、俺はこんなペチャパイには興味ないぜ……。
また泣かれると困るから、あえて口には出さない。

◆□◆□◆□◆□◆□

「クリームソーダ２つ、お持ちしましたー」

ウェイトレスが、クリームソーダを２つ、テーブルに並べていく。

「この飲み物なにー？」

セナが、きょとんとした目つきで、それを見つめている。

「これは、クリームソーダってやつだ。飲んでみろ。なかなかおいしいぞ」

「え～～、変な色してて気味が悪い～まずそう～」

まさかの食わず嫌い。

「見た目で物を語るのはよせっ！」

「だって、ホントにまずそうなんだもん～」

「だからといって、あまり大きな声で言うな。ほら、店員さん、睨みつけてるだろっ」

さっきのウェイトレスが、「なんだこのクソガキ」とでも言いたげな顔をして厨房へと戻っていく。

「ごめんちゃい」

「この子、好奇心旺盛で、思ったことすぐに口に出しちゃうから……。ごめんなさいね。きっと見るもの聞くもの全てが新鮮に感じられるんだわ」

繭がフォローを入れる。

「繭の方が、よっぽどお姉さんに見えるよ」

『ったく、それに比べて、アイツときたらもう……。少しは繭を見習ってお姉さんらしくしろっての』聞こえないように小声で呟く。

するとさっきまで無邪気にはしゃいでいたセナが、突然俺の方を振

り返った。

「何か言った？」

まるで「何でもお見通しよ」と言いたげな目つき。

「いいや、何も」

「な～んか、セナの悪口言ってたように見えたんだけど～？」

なんつー地獄耳だっ、おい！

「いや、それは気のせいってやつだろう」

◆□◆□◆□◆□◆□

「ところでさ、おにーさんは、何も頼まないの？」

セナが、きょとんとした顔で訊ねてくる。

「お前ら2人にクリームソーダを驕ったおかげで、金欠だよ」

「キンケツ？？」

セナが首を傾げる。

セナに何かを説明するのは非常に手間がかかる。

「もういい。俺は水が好きなんだ」

そう言って、水の入っているコップを手に取る。

「へえ～水好きなの？」

「ああ、俺は水が大好物なの」
コップの水をガブガブと飲み干した。あまりおいしくない。
「すいませーん！水のおかわりくださいー！」
こうなったら意地だ。何杯でも飲んでやる。
◆□◆□◆□◆□◆□
時刻は6時を回り、日が暮れようとしていた。
繭の腕に抱かれながら、すーすーと寝息を立てるセナ。
こうして寝顔だけ見ると、可愛いんだけどなぁ。
普段はクソ生意気なだけに、えらく対照的にうつる。
「すっかり眠っちゃったね」
繭が、眠っているセナの頭をやさしく撫でる。
その姿は、まるで本当の姉妹のように見えた。
「ごめんなさいね。迷惑かけちゃったみたいで」
繭がセナの代わりに謝ってくる。
「ああ、気にするな。繭のせいじゃないさ」
商店街の出口の方へ向けて歩き始める。
「うぅん……」

セナが、目をぱちぱちさせながら、かすれたような声を発する。
だが、またすぐに目を閉じ、眠りにつく。

「ほんと、好奇心が旺盛だから。この子は……」
「いつもこんな調子なのか？」
「うん。新しいものを見たり聞いたりしたときはね」
「疲れるだろ？」
「いや、もう慣れっこよ」

セナのことは全て熟知しているかのような言い方。
その様子から、セナとはずいぶん昔からの付き合いのように見て取れた。

「気心知れてるんだな」
「うん」
「なら良いんだ。家まで送っていこうか？」
「いいよ。すぐ近くだから」

……ん？まあ、いいや。

「じゃあ、また明日な」
「じゃあね」

そういうと、セナを背中に抱え、夕暮れの町に消えていく。
その後姿を俺は見送った。

◆□◆□◆□◆□◆□

「あれ……？繭？」
「あ、起きたの？」

「セナ、自分で歩けるっ」
「あ、セナっ！ちょっとどこ行くの！セナっ！」
〜セナ〜
一陣の風が、その金色の髪を靡いた。
つぶらな瞳。いたいけな顔つき。
瓜二つの『それ』と、目線が合わさる。
「セナ、ここにいたの？」
淡々とした口調で話しかけてくる。
まさか、ここに来ていたとはね……。
あの場所で待っているって言ってたのに。
「ルナ……お願い。もう少しだけいいでしょ？」
セナの最後のお願い。
これだけは、ルナに何て言われようとも譲ることはできない。
「あれだけ、やめておいた方がいいよって言ったのに。辛くなるだけよ？」
「でも、ずっとずっと願っていたことだったんだよ？」
「それは分かるわ。でも後になって、やっぱり嫌だなんて言わないでね」
「大丈夫……ちゃんと分かってるから。ルナもせっかくなんだから、エンジョイしてきなよ」
「あたしは……」
ルナがそう言い掛けたその時、

「あ、セナ。ここにいたの」
繭が駆け寄ってきた。
「ルナ？」
ルナはいつの間にか姿を消していた。
辺りを見渡しても、影一つ見当たらない。
「あれ？さっきの子は？」
繭が、訝しげに訊ねる。
繭には、まだ教えるのはやめておこう……。
「ううん、なんでもないっ。帰ろっ」
ルナ。あなたの言うことは分かる。
でもルナ、もっと自分に正直になりなよ。
セナには分かる。ルナだって本当は、きっと……。

三日目「幻想光景」―1

今日も、あの場所に来ていた。
どこまでも広がる青空。小鳥の囀り。一陣の風が頬をかすめる。
すでに日常と化した光景。
今までは、俺一人だった。
そう、俺一人が、思い出を胸に秘めて、毎日この場所に通い続けていた。
今までも、これからも、そのはずだった。
だが、先日の思いがけない邂逅により、繭とセナが新たにその日常に加わることになった。
内心、俺は嬉しかった。
だって終わり行く思い出を前に、新たな思い出がひとつ、今こうして作られようとしているのだから。

「はぁ……昨日は疲れたなあ」

ため息を付き、周囲を見渡す。

「さぁて、今日はどこにいる？見つけだしてやる」

そう意気込んだ矢先、

「みーーつけたっ」

セナが木陰から飛び出てきた。

「うおっ」

思わず声を漏らしてしまう。
俺の体に纏わり付くセナ。

「おい、はなせっ」

「えへへ～」

くそっ、まんまと先を越されてしまった。
なんか、悔しい……。
こうなったら……、からかってやる！

「お、お前は……、かの有名なセナさんじゃないかっ！ここで会ったが千年目！今日は何しに来た？」

「何しに来たって……おにーさんと同じだよ。木を見に来たんだよっ」

「まさか、そんなことはあるまいっ。実はお前、俺を殺しにきたんだろ？」

「もう～、何言ってるの～？」

怪訝な面持ちで、俺を見つめてくる。
どうやら冗談が冗談として通用していないようで。
面白いから、さらに続けてみる。

「セナ。前々から思っていたんだが、実はお前、俺を暗殺すべく闇の世界より遣わされし使者だろ？」

「はい？？」

きょとんとした目つきで、首を傾げている。

「つまり、こういうことだ。普段のガキっぽい振る舞いは実は俺を欺くためのカモフラージュで、本当の狙いは、隙をついて俺を暗殺することにあるんだろ！な、そうだろ！？」

「意味わかんないっ！それにセナ、ガキじゃないし」

ガキ呼ばわりされたことが気に食わないらしい。

「いいや、お前は十分ガキだ」

「ガキじゃないもんっ」

「いや、ガキだ」

「意味分かんないしっ。おにーさんなんて、だいっきらいっ」

頬を膨らませて怒るセナ。

いや、怒らせるつもりはなかったのだけど……。

よっぽど子供扱いされたのが気に食わないのか。

「まあまあ、そんな怒るな。冗談だ」

「ふんっ」

ふてくされてしまった。

こうなったら、おしまいだ。

話を別の方向に振ろう。

「なあ、セナ」

「ふんっ。おにーさんの話なんて聞かないもんっ」

「おーい」

「ふんっ」

俺の話なんて聞く耳持たずってか。
どうやら、かなり怒り心頭の様子。

「これは真剣な話なんだ。心して聞いてくれ」

神妙な面持ちで、セナに告げる。
どうやらこれは只事ではないと察したか、セナも深刻そうに身構える。
そして、こちらの方を振り向き、閉ざしていた口を開いた。

「……どしたの？」

よし！食らいついてきた。

「いいか、これから話すことは2人だけの秘密だ。誰にも話すなよ、いいか」

「……うんっ」

しばしの沈黙の後、俺は口を開く。

「……繭のおっぱいって、ものすごく大きいよな」

……

……

……時が止まった。

その静寂を切り裂くように、セナが声を上げる。

「――最っっ低っ。これが真面目な話なのっ？おにーさんって、ほんと、いっやらしいんだからっ」

「いやいや、俺は真面目だぞ。一体どんな食生活したら、あんなに大きくなるのか不思議に思わないか？Ｅカップは軽くあるぜ。俺は常日頃から疑問に思ってる」

「ほんと、くっだらないねっ。もしかしたら、ずっとそんなこと考えてるの？」

「ああ。一日に３６時間ぐらいは考えてる」

「どうしようもないねっ！そんなの、おにーさんだけだよっ。おにーさんの頭の中って、エッチなことでいっぱいなんだねっ」

心底、俺を軽蔑した様子で吐き捨てる。

「といってもな、お前だって、本当のところ、おっぱい大きくなりたいと思うだろ？」

「え……、それとこれとは話が違うよっ」
図星をつかれたか。戸惑うセナ。
「でも、小さいよりは大きくありたいと思うだろ？」
さらに、核心へと迫る。
女の子なら、誰しもが抱く（と思われる）願望である。
「なにそれ～、セナが胸小さいこと馬鹿にしてるわけっ？？」
ああ、まるでまな板みたいだと言いたいところだが、これ以上怒らせたら収拾が付かなくなりそうなので言わない。
「違うよ。セナが純粋にどう思うかだ。正直に言ってみ？」
「そりゃ……、大きくなりたいと思うけど……」
ぼそっと本音を漏らす。
「だろ？どうだ？俺と組んで、このベールに包まれた謎を解き明かさないか？」
「解き明かすって、一体どうするわけ？」
よし、乗ってきた。この調子だ。
このまま言葉巧みにセナを丸め込んでしまおう。
作戦その1。トム。

「まず、お前がドサクサに紛れて繭のブラジャーを盗む。そしてそれを俺が丹念に解析する。どうだ？」

「単にそれって、おにーさんが繭のブラジャーを楽しみたいだけじゃ……」

「いいや、それは誤解っつーもんだ」

「でも、どうやってブラジャー盗むの？」

「それはな……、繭がお風呂に入ってる隙に、サッと」

「無理だよっ。セナ、そんなにすばしっこくないもんっ。繭、ああ見えて警戒心強いから、気付かれちゃうよっ」

「まあ、確かに無理があるかもな。だが、これで終わりではない。策はまだある！」

しつこく見えるかもしれないが、俺はなんとしてでも繭のおっぱいを堪能しなければいけない。
なぜならそれは、俺に課せられた使命なのだから。
そう、これはマニフェストデスティニー。

作戦その2。ハリー。

「たとえば、こんなのはどうだ？まず、繭に気づかれないように、こっそりと繭の背後に回る」

「それは、おにーさんが？」

「いや、セナ。お前がだ」

「セナが？」

「ああ、そうだ。いいか？俺が合図を出すから、合図が来たら思いっきり繭を驚かしてくれ。きっと繭は、驚きのあまり正面から倒れてしまうだろう」

「それで？」

「俺がすかさず飛び出していき、繭の体を真正面から受け止める！さすれば、あらや不思議！俺の両手には、繭のおっぱいがスッポリと収まっているという算段さ！そして揉む。ひたすら揉む。感謝もされて、おっぱいも揉めて、どうだ？完璧だろ？」

「なんか、それ……おにーさんが、ただ繭のおっぱい触りたいだけじゃん……」

そう言われてしまえば、元も子もない。
だが、俺は繭のおっぱいを触ることにより、新たな境地を得ようとしていることは紛れも無い事実だ。
それを分からせてやらなければならない。

「いや、違う！この作戦の真意は、あくまで学術的見地に基づいてる。ほら、医者だって具合の悪い患者を前にしたら、まず触診するだろ？それと同じことだ。俺は直接、その手で触れることにより繭のおっぱいにまつわる謎を解き明かそうとしているわけだ！そうすれば、セナが巨乳になることも夢ではない！」

我ながら、うまいことを言った！

さあ、これでセナも同調してくれるはず！

……あれ？

「なーんか、口では立派そうなこと言ってるけどさー、おにーさんは、目つきがいやらしいのっ。説得力に欠けるよ！それにほら、ヨダレ垂れてるよっ」

「あっ」

くそっ。とんでもないことに気づきやがってっ！

慌てて拭う。

「ねえねえ、何話してるの？」

背後から声。

「いや～それがさ、繭のおっぱいが……って繭！いつからここに」

繭が怪訝な様子でこちらを見つめていた。

「今来たばかりだけど……。わたしのおっぱいが、どうかしたって？」

「いや、そ、それは……」

「おにーさんが、繭のおっぱい揉みたいんだってっ。ついでにブラジャーも盗むつもりらしいよっ」

横からセナが余計なことを述べる。

なんてことを言ってくれたんだ、おい！こんな言い方では、誤解を与えかねないじゃないか！

「へぇ……そんなこと言ってたんだ……」

そう呟くと、俺の方に向かって、ずかずかと迫ってくる。その迫力に圧倒されて、思わず後ずさる。

「ち、違う、誤解だっ！そんな話してないっ」

頑なに否定。

「じゃあ、さっき言いかけたおっぱいって何だったのかな～？」

満面の笑み。それが俺には、とてつもなく恐ろしく見えてならない。さらに後ずさりを続ける。

背後には崖。

落ちたら、ひとたまりもない。

冷や汗が頬を伝う。

「そ、それは……、繭のおっぱいがあまりに魅力的だから、ぜひともその魅力について研究を行いたいということをな……。決してエロのためなんかじゃない！な、そうだろ？セナ？」

必死に弁解する。

「そのわりには、ずいぶんとニヤついていたよねっ」と、セナ。

だから、余計なことを言うなーーーーーっ！

「やっぱり……」

繭が言いかける。

「やっぱり？」

「やっぱり昨日、町を歩いてるときにドサクサに紛れてわたしの胸触った犯人はあんただったんだ！ほんと、あんたってサイテーーーーっ！！」

ばれた！

「違う、誤解だ！ご……、くぁあああああぁぁああああああああああああああああぁぁぁぁあああああ」

眼前には澄み渡った青空が、どこまでも、どこまでも広がっていた。
ああ、そうか。俺、今、空を舞っているんだな……。
さようなら、現世。こんにちは、黄泉の国。閻魔大王が大口開けて笑ってるぜ……。

◆□◆□◆□◆□◆□

「あーあ、落ちちゃったね、繭。どうする？」

「ふんっ。一度死んで、頭冷やしてくれればいいのよっ！」

「繭、怒らせると怖いね……」

◆□◆□◆□◆□◆□

「なにも、崖から突き落とさなくても……」

全身泥まみれだ。

まさか、命綱なしでバンジーやさられる羽目になるとはな……。

恐ろしや……、おっぱいの代償。

「あ、生きてたんだ」

そう言い、繭がこちらを一瞥する。

「ああ、生きてたぜ。一瞬、三途の川が見えた……」

「いっそのこと、渡っちゃえばよかったのにっ。まあ、崖から這い上がってきた根性だけは認めるわっ」

たいそうご立腹の様子の繭。

しかし、なぜ、そこまで怒る必要がある!?

別にいいじゃないか、おっぱい触るくらい!減るもんじゃないんだしな。

それに、エロは地球を救うという格言があるように、繭のおっぱいは俺を救うんだから!

……とまあ、そう言いたいところだが、今それを言ってしまったら、本当に命を奪われかねないので、やめておく。

ああ、可愛い顔して、地獄の閻魔大王より恐ろしいぜ。

「えへへ〜、おにーさんって以外と打たれ強いんだね〜」

呆気らかんとセナが笑っている。

「いや、もう8割くらい死に掛けてます……」

◆□◆□◆□◆□◆□

大樹の下に移動し、それを背にして座る。
機嫌が治ったみたいで、ルンルン気分で、弁当箱を取り出す繭。

「なあ、この弁当繭が作ったのか？」

「うん。今日は早起きして作ってきたんだ」

ちゃんと、３つ分ある。

「おいしそうだね～」

セナが、物欲しそうな顔でそれを見つめている。

「おし！じゃあ、ここらで昼飯といくか！」

その時だった。
何かが、こちら目掛けて駆けてきた。
目を凝らし、それを見つめる。

――狐だ。

「あぁ、狐か。珍しいな。まだここらにもいたんだな」

どれ、餌でもやるかと気を許した瞬間。
それは弁当箱の入った袋をサッと奪い取ると、瞬くほどの素早さで
丘の下目掛けて駆け出して行った。

「あっ」
「あっ」
「あっ」

声が重なる。

「くそっ、取られた」

「どうする～繭？」

セナが繭の方を見つめる。

「え、え……どうしよう」

うろたえる繭。

とにかく、このままボーっと突っ立てていても仕方がない。

「後を追うぞ！」

狐の向かった方角に向けて、俺らは駆け出した。

三日目「幻想光景」―2

――商店街。

燦燦と日差しが降り注ぐ昼のさなか、狐の後を追ってひたすら走る。
狐は一向にその足を止めようとする気配がない。
軽妙な身のこなしで、体を変幻自在にねじ曲げながら、行き交う人々の間隙をすり抜けていく。
俺らもそれに続く。
だが、人間と狐とでは足の速さは比べ物にならないほど違った。
それでも、どうにかこうにか巻かれないように、その後を必死に追い駆ける。
けれども、その甲斐むなしく、互いの距離は離れていく一方で、いつの間にか、その姿を見失ってしまっていた。

「くそっ、どこ行った！」

立ち止まり、辺りを見渡す。

「あ、あそこにいるよ！」

セナが指差した先。そこは平屋の屋根の上。

見ると、奴がせせら笑いを浮かべながら俺らを見下ろしていた。
人間なんぞに捕まるはずがないってか。
なんだか馬鹿にされているみたいで、無性に腹が立ってくる……。
こうなったら、なんとしてでもこいつをひっ捕らえて盗られた弁当箱を奪い返してやる！

「捕まえるぞ！」

「で、でもどうやって」

うろたえるセナ。

「俺に任せろ」

そう言い、壁に平行して設置されているパイプに足を掛ける。

「あ、あぶないよ！落ちたらどうするの？？」

繭が声を荒げて、進路を塞ぐ。

「大丈夫。これぐらいの高さなら、なんとか行けるさ」

グッドサイン。

繭の静止を振り切り、両手足を巧みに駆使してパイプを伝っていく。

……

……

――よし、あと一歩だ。

ここまでくれば、目標は目と鼻の先。

一気にひっ捕らえてやる。

――ターゲットオン。

全身の力を振り絞り、目標めがけて、思いっきりジャンプする。

「よっしゃ、ゲット！」

……その瞬間、奴は体をヒョイとくねらせてその場を離れていった。

「なぬ??」

俺の手は、空中の何もないところを捕らえていた。

「あああああああぁぁぁああああ」

体のバランスが崩れ、地面に向けて落下する。

響き渡る衝撃音。

まさか、今日だけで2回も落下するとは思わなんだ。

「だ、大丈夫??」

繭が駆け寄ってくる。

さすが繭。怒らせると怖いが、慈愛に満ちているぜ……。

願わくば、そのおっぱいを……と言いたいところだが、それを言ってしまったら、出る杭のごとく打たれかねないのでじっと堪える。

一方、セナは俺の無残な姿を指差しながらゲラゲラ笑っていた。

◆□◆□◆□◆□◆□

――住宅街。

狐を追って、走る。ひたすら走る。

疲れが溜まり、だんだんと走るスピードも遅くなってくる。

徐々に狐との距離も離れていく。
もうこりゃだめだと諦めかけたその瞬間。
狐は、ぴったりとその足を止めた。
そして俺らの方を振り返ると、微動だにせずに様子を伺っている。
まるで、しつけられた犬のように。
……なんだかよく分からないけど、これはチャンスかもしれない。
足を速める。

「よし！あと少し……」

目と鼻の先の距離まで来たそのとき。
タイミングを見計らったかの如く、一目散に逃げ出していった。

「くそっ」

……もしかして、俺らは狐に遊ばれているのか。

◆□◆□◆□◆□◆□

――住宅街を抜け、山道を抜け、そして森へと至る。

狐は森の奥めがけて、一直線に駆けて行く。
負けじとその後を追うが、相変わらず追いつく気配は一向に無い。
後ろを振り返るとセナが相当苦しそうだ。繭も同様だ。
ちょっと無茶をしすぎたか。
そろそろ限界のようである。
俺はまだまだいける気はするが、これ以上はこの2人が付いてこられないだろう。

「少し休むか」

木を背にして、その場に腰掛ける。
「おにーさん、足速すぎだよぉ……」
セナが息を切らしながら地面にへたり込み、言葉にならない言葉で述べる。
「もう……、ちょっとはわたしたちのことも考えてよねっ」
繭も同じように息を切らしながら言う。
「わるい、わるい。あれを捕まえるのはもう無理だ。諦めよう」
しぶしぶ頷く2人。
しっかし、よく考えりゃ、人間が狐に追いつくなど到底無理な話だわな……。
「ねぇねぇ、おにーさん、あれ何？」
セナが俺の肩をぽんぽんと叩く。
見ると、そこにはキラキラと輝く何か。
「……あれは、湖だな」
かつては、温泉湖として栄えた場所。
幼少期の頃に、両親に連れられて来た記憶が微かに残っている。
「湖？こんなところに？」

繭が、セナの指差した方向を見つめながら言う。

「ああ。行ってみるか？」

「うんっ、行く！繭も行こっ！」

さっきまでの疲れはどこに行ったのか。はしゃぎながら、駆け出していくセナだった。

◆□◆□◆□◆□◆□

そこには、幻想的ともいえる光景が広がっていた。
果てが見えないほどの広大さを誇るそれは、見る人全ての目を惹き付けんとする霊気を帯びていた。
水浴びする白鳥。空を飛び交う水鳥。
水面に太陽の光が反射して、辺り一帯が煌々とした輝きを放っている。
現実離れしたその異質さに、童話の世界に紛れ込んでしまったかのような気にさせられる。

「すっごい、きれい～」

セナが目を見開いたまま、固まっている。

「うわあ……」

繭も、たいそう呆気に取られた感じだ。

「先が見えないよ。一体どこまであるのかな？」

セナが遠くの方を見渡しながら呟く。

「……ほわああ」

繭はセナの言葉など、耳に入っていない様子だ。

「ねぇねぇ、この水、飲めるのかな？」

セナが俺のところに寄ってくる。

「あぁ、多分」

透き通るほどの綺麗な水だ。まあ、飲んでも大丈夫だろう。
地面に膝を付き、両手ですくい、一気に飲み干す。

「うん、うまい」

セナも、俺に倣う。

「うん、おいしっ」

「ねえ、あれは何？」

繭が指差した方に目を向けると、そこには何かの設備のようなものが打ち捨てられていた。

……まだあのときの名残が残っていたのか。

「実は昔、ここ一帯は温泉だったんだ。あれは、そのときに使われてた建物だろう」

「へぇ……噂には聞いてたけど、ここがそうだったんだ」

「まあ、俺が幼少の頃のことだから、記憶はあまり鮮明じゃないんだけどな」

「でも、今は湖になってるんだよね？」

「ああ、ある日突然枯渇したんだ」

「温泉がでなくなっちゃったってこと？」

「そうだ。その成れの果てが、この湖ってわけ」

そう言うと、繭は何やら思いついた顔をして、

「もしかして、前に言ってた過疎化が進んでいる理由ってそれだったの？」

「ああ。それはそれはもう、今のこの姿からは想像がつかないくらい、一大テーマパークとして栄えていたって話だぜ。北からも南からも、それ目当ての観光客がひっきりなしに訪れていたって聞く。おかげで、さぞかし町の経済は賑わっただろうよ」

さらに話を続ける。

「だけど温泉が枯渇してからというもの、この有様さ。町の経済は凍りつき、多くの会社や商店が看板を下ろすことになった。そんな現状を見限ったのか、毎年のように人が減っていく始末だ」

「そうだったんだ……」

悲壮感漂う様子で水面を見つめている。

「いずれは埋め立てられるだろうな……この湖も」

「え？どうして？？」

面食らった様子で、声を大きくした。

「前にも言ったように、人を呼び込むために、あらゆるところを削り倒して宅地に開発してるんだ。ここもきっと例外ではないさ。これだけ広いんだ。遊ばせておくには勿体ないだろ」

「……でも、でもここだって、わたしの……」

ん？

「どうした？」

「……ううん。なんでもない」

何か言いかけたように見えたが……、まあいいか。

「ねぇねぇ、あれ乗ってみよーよっ」

遠くからセナの呼ぶ声がする。

三日目「幻想光景」―3

見ると、そこには一隻のボートが。セナがそれに乗り込もうとしていた。

「バカ、やめろ！」

手を掴み、陸地へと引き戻す。

「きゃっ！」

一気に後方へと加わった力で、バランスを崩すセナ。

「もう、なにするのっ！」

「お前をボートに乗せたら、ボートが転覆しかねない。だからダメだ」

「どうして～？？」

不満気な表情。

「デリケートな乗り物なんだよ。一歩間違えたら、ボートごと湖に放り出されてお陀仏だ」

分かってくれ、セナ。

お前をボートに乗せることは、生身ひとつで地雷原を歩くのと同じだ。

だから、おいそれと認めるわけにはいかない。

「じゃあいいもん！セナ一人で乗るからっ」

ふて腐れるセナ。俺たちを無視して、そのまま一人でボートに乗り込もうとする。

「そうはいかない」

セナの腕を引っ張り、再度引き戻す。

「むう～～～！」

これで諦めただろう。

向こうの方にいる繭に合図を送り、「さあ、戻ろう」とセナの手を引く。

だが、セナはこの場を動こうとしない。

地面にしゃがみこみ、いじけている。

「ったく、しょうがないな……」

しばらく、その場で立ち往生する。

見ていると、セナの瞳に徐々に涙が溢れていく。それを袖で必死で拭う。だが、嗚咽ひとつ漏らさない。泣くのを必死に堪えている感じだ。

……くそっ！こんな痛ましい表情を見せ付けられては、ひとたまりもないだろ。

俺だって好き好んで、こんな小さな女の子を泣かせたいわけではないからな。

俺が折れるしかないか……。

「あー！もう、分かったよ！俺の負けだ。でもいいか、約束しろ。ボートの上では静かに座ってろよ。騒いだら沈没だからな」

今回は俺が折れる形になったが、これだけは、しっかりと言い聞かせておかねばならない。保護者……いや、付添い人として。

「むう～。別に、ちょっとぐらい騒いでも大丈夫だもん！」

……って、やっぱ暴れる気まんまんじゃねーか！

「じゃあ、だめだ。帰るぞ」

そう言い、背を向けた矢先。

その一瞬の隙を突いて、ボートへと乗り込むセナの姿が横目に過ぎった。

「――おい！」

「えへへ～。泣きまねっ」

まんまとはめられた！このクソガキ！

「いいじゃん、ちょっとだけなら。乗せてあげようよ？」

繭がこっちにやってきて、セナを援護する。

こういうところが甘いんだよな、繭は……。

「どうなっても知らんぞ、俺は……」

セナを一人だけで乗せるのはあまりに危険すぎるので俺らも同じボートに乗り込むことにした。

◆□◆□◆□◆□◆□

「なんか、白鳥になったみたい！ステキ！」

セナが声を張り上げる。

まあ、もともとこのボート自体が白鳥を模したやつだからな。

白鳥になった気がするではなく、実際に白鳥の上にいるのだ。

「おい、セナ。いいか、絶対に暴れるなよ。絶対だからな」

改めて、念を押しておく。

「沈んじゃうから？」

「ああ、俺ら全員あの世逝きだ」

「へえ～、面白そう～！」

何てことを言い出しやがる。

「面白くねーよ、バカ！」

思わず突っ込みを入れてしまう。

呆れた。こいつには危機意識というものがないのか。

「なあ、セナ、お前は……」

そう言いかけたときだった。一匹の蝶が目の前を横切った。
セナの視線が、それに釘付けになる。
あぁ、子供はそういうの好きだからな。
なんだか、とてつもなく嫌な予感がする。
蝶は俺らの周りを旋回している。
蝶の動く方向につられてセナの首も動く。
何回か旋回して、上空へと飛び立とうとした瞬間、恐れていたことが起きた。
セナがそれを捕まえようと上へと跳んだのだ。

（バカ……！）

着地の衝撃で、ボートが大きく揺れる。
俺と繭は咄嗟の判断で近くにあるものにしがみつき、事なきを得た。
だが、セナの華奢な体は、いとも容易く外へと投げ出されてしまった。

――時の流れが一瞬止まったかのように思えた。

平静を取り戻すと、自然と足は動いていた。
慌てて駆け出して行き、すんでのところでそれをキャッチ。

その衝撃で、再度、船が大きく揺れる。

冷や汗が流れた。
大きく溜息を付く。
さすがにもう我慢の限界だった。

「バカ！だから言ったろ！」

セナを放り出し、大声で怒鳴りつける。

「ご、ごめんなさいっ……」

セナの体が、びくっと震えた。

今までセナがどんな悪ふざけをしても、本気で怒ったことはなかった。だが、今回は違った。

セナにとっては2度の衝撃が間髪いれずに訪れた感じだっただろう。よほど、ショックだったのか。その瞳からは、涙がぽろぽろと零れ落ちていた。

「そんな言い方しなくても……」

泣きじゃくるセナをなだめながら、繭が言う。

「繭、甘やかしすぎだぜ。こういうときはガツンと怒らなきゃいかん」

「……」

「姉としてな」

「わたしの方が年下です……」

◆□◆□◆□◆□◆□

険悪なムードが続いていた。

そりゃ無理もない。あんなことがあったばかりだ。

冗談でも言って場の雰囲気を和ませようと思い立ったそのときだった。繭が空気の流れを変えるかの如く、口火を切った。

「でも不思議だよね。こんな広大な温泉が、ある日突然枯渇してしまっただなんて」

ああ、あの話の続きか。

「まあ、そういうこともあるだろう。中には、山神の祟りじゃないかとも言ってるやつもいるけどな」

「山神？」

「この町に古くから伝わる信仰さ。普段は俺らのことを見守っててくれるけど、ひとたび逆鱗に触れると、とんでもない大災害を引き起こすらしい」

「たとえば？」

「干ばつ、不作、飢餓、疫病……。おおかた、そんなもんだろう」

「そういったときは、どうしたの？神さまに許しを請うの？」

「まあ、そうだ。人身御供によってな」

「……人身御供？」

「少年少女の心臓を貢物として神に差し出したと聞く。これと引き換えに、皆を救ってくれと」

実際にそのような儀式が行われていたのは確からしい。だが、後世で大分脚色された部分もあると聞く。

だから、どこまでが本当かは分からないが……

「それって酷くない～？いくら皆を救うためって言っても、生きている人間を生贄にだなんて……」

側で聞き耳を立てていたセナが、話に割り込んできた。

「ああ、酷いと思うよ。でも昔の人は、それしかすがる術がなかったんだから、ある意味しょうがないとも言えるな」

「……それしかすがる術がなかったって……どういうこと？」

セナが首を傾げる。

「昔の人は、あらゆる事物に神が宿っていると考えたんだ。今のような高度な文明なんてなかった。今なら迷信として一蹴されるかもしれんが、時代の背景から考えて、そうしたアニミズム（精霊信仰）に囚われてしまったのは何ら不思議ではない。そしてそうした信仰が、心の平静を保っていた側面もあるだろうよ」

「迷信だよ、そんなの……。おかしいよ。そんな迷信のために、罪もない人が無駄死にさせられるなんてさ」

どうやら、納得いかないみたいだ。

そりゃ、そうだろう。セナはまだ子供だ。心が純粋なのだ。

だが、俺も同じ気持ちだ。もし俺が今の記憶を引き継いでその時代にタイムスリップしたら、その儀式を妨害しているかもしれない。

でも、ひとつ言いたいことがある。

「いや、無駄死になんてことはないと思うぜ」

「……」

「さっきも言ったように、昔の人はあらゆる事物に神が宿っていると考えた。いいかえれば、この世のあらゆる事象は全て神のせいにされたんだ。そして、その神を鎮めるために、多くの人間が生贄として差し出された。これがどういうことか分かるか？」

「わからないよ……そんなの」

「ここからは俺の予測だが、ある種の心理的効果はあったと思う。神の逆鱗から解放されたという安堵が、次なるステップへと進むための活力を見出すことに繋がったんじゃないか？」

「……そうかな？」

「だから、無駄死になんてことはないと思うぞ。まあ、酷い話であることには変わりがないが」

「うん……」

納得してくれたようだ。
俺だって、そんなふざけた儀式を認めたくはない。
だが、その儀式によって犠牲になった人たちを無駄死にだと言うのは、なんだか違う気がしたのだ。

繭の方に目を向ける。
悲しげな表情で湖面と見つめていた。何かに思いを巡らすように。
その思いを巡らす先は俺たちが今していた話ではなく、まるで、いつか見た遠い遠い空の果てにある光景を回想しているかのようだっ

た。
繭は、時折こういう表情を見せる。
「どうした？繭」
「うん……？いや、なんでもない」
「そうか。なら、いいんだが……」
と、その時。
ボートが何かにぶつかったみたいで、大きく揺れた。
繭とセナは一緒にいたため、外へと投げ出されることはなかった。
だが、俺は衝撃を真下から受けたため、大きくバランスを崩した。
繭へ、真正面から寄りかかる。
思わず、目を閉じた。
……
……
――何やら、柔らかい感触。
揉んでみる。
とても揉みごたえがあった。
もしや、これは……。
目を開けると、案の定そこには大きく熟した２つの果実があった。
「Ｆはあるな」

そう呟き、さらに揉み続ける。

「――――――！」

突如、繰り出されるアッパー。
水しぶきが、辺り一面に舞った。
そうして俺は海の藻屑となったわけだ。

◆□◆□◆□◆□◆□

ボートを降りる。日が暮れかかっていた。カラスの声が木霊している。

「なんか、最後は重い雰囲気になっちゃったね」

「まあ、ちょっとこの場にはそぐわない話題だったかもな」

あのセナが引きずるぐらいだ。
配慮が足りなかったかもしれない。
自分の不甲斐なさを悔いた。

……だが、不思議な点が一つある。
繭がこの話題に何も反応を示さなかった点だ。
誰だってこんな話を聞かされたら、一つや二つの反応は示す。
だが、繭は終始黙ったままだった。
既にその話を耳にしたことがあるのだろうか。ならば、あの無反応は不思議ではないが……。
でも、繭はもう地元の人間じゃないんだろう？
まぁ、幼い頃に耳にしていた可能性は否定しきれないが……。

「セナ、しばらく立ち直れそうにない……」
見ると、さらにセナが落ち込んでいた。
「お前は持ち前の脳天気さを活かして、とっとと立ち直れ」
「む……、ノーテンキじゃないもんっ」
「おお、その調子だ」
「むうぅぅ！」
横で俺らの掛け合いを見ていた繭が、くすくすと微笑みを浮かべている。
「どうした、繭？」
「いや、なんか2人、すっごい仲良いな～って思って」
……仲良いのか？俺たち？
そのとき。
「あ、あれ！」
そう声を上げ、セナが指差した先には、狐がいた。
そうだ。俺らを散々コケにしてくれたあの狐だ。
だが、口には弁当箱はなかった。もう食っちまったってか。

「追うぞ！」

なんとしてでも、さきほどの雪辱を晴らしてやらねばならん。
意地と根性だけでその後を追い続けた。

◆□◆□◆□◆□◆□

しばらく進むと、開けた場所へ出た。
月の光に照らされて、辺り一面が輝いて見える。

まさしくそれは、もう一つの幻想光景だった。

繭もセナも呆気に取られている。

さらに歩みを進める。

――奥の茂みから、気配のようなものを察知。

見ると、一匹の狐が横たわっていた。
そしてそれに寄り添うようにして、さっきの狐が鎮座している。

「ここにいたか！」

捕まえようとした、そのとき。

「ちょっと待って……！よく見て。これ……」

繭が止めに入る。

目を凝らして、横たわっている狐を凝視する。

……腹の辺りが真っ赤に染まっていた。
何者かに銃で撃たれたようだ。
幸い、致命傷ではないようでまだ息はある。
きっと流れ弾が当たったのだろう。

「そういうことだったのか……」

これで分かった。
俺らから弁当を盗んだワケは、相棒であるこいつに生きるための食料を送り届けるためだったのだ。
狐には狐の、やんごときなき事情があったというわけだ。
全てが氷解した。
俺には、こいつを責める気にはなれない。

「なんか、可哀相だよ……」

その光景を見ていたセナが言う。

「ほら、食え」

カバンの中に入っていた食料を差し出してやる。
狐は、それに噛り付いた。
むさぼるようにして、それを口にする。

「繭、なんかしてやれないか？」

「う、うん。ちょっと待ってて！」

……

……

応急処置ではあるが、手当てはした。
これで、しばらくは持つだろう……。
明日もまた来よう。

「元気でね」

セナが心配そうに、そう呟く。

その時だった。
茂みの中から、狐の大群が出てきた。

「……」
「……」
「……」

俺も繭もセナも、呆気に取られる。
そして、それらは俺らを囲むように一つの輪を作った。

「うわ……綺麗」

繭が呟く。

「俺ら、歓迎されてるのかな？」

「なんか、狐に化かされてる気分だね……」

セナが言う。

「まあ、たまにはそういうのも風流があっていいかもな」

◆□◆□◆□◆□◆□

「うわぁ、綺麗な星空……。星が落ちてきそう」

狐の輪に囲まれながら、夜空を見上げていた。
どこまでも広がる満天の星の海。
セナは、スースーと寝息を立てながら眠っている。

「……いつまでも、こんな時間が続いたらいいな。こうして、いつまでも皆で笑い合っていたい」

まるで今のこの時間が、遠い昔の出来事であるかのように繭が言う。
なんでそんな悲しいこと言うんだよ。
俺らが、こうして過ごしている時間は全て幻だと言いたいのか……？

「続くさ。絶対に」

断言した。

そのときだった。

――思わず、我が目を疑った。

繭が涙を零したのだ。
一粒の涙が、頬をつたって流れ落ちる。

「どうしたんだよ、繭……」

「ごめん。懐かしい気分になっちゃった」

そう言って、涙を拭う。

「……過去より、未来の方が大事だぜ？」

言って気がついたのだが、少しばかり配慮がない言葉だったかもしれない。

だが、他に慰めの言葉が見当たらなかった。

「うん、そうだね……。でもそれはあなただって同じ」

「ま、まあ、そうだな」

返す言葉が見当たらなかった。

「……昔もね、この場所で、同じように星空を見上げていたの。わたしにとって、かけがえのない大切な思い出……。そのときのことを思い出しちゃった」

「一人でか？」

「いや……、とても仲の良かった友達と」

「まあ、そういうのもいいかもな。夜空を見上げながら語り合うなんて、なんだかロマンチックでな」

「遠い遠い昔の話だけどね……。でも、わたしには、まるで昨日のことのように思えるの。手を伸ばせば届きそうなのに、決して届かない……戻りたくても、もう戻れないの」

なんとなく分かった。
……きっと、その友達とやらは、もうこの世にはいないのだろう。
だから、手を伸ばしても決して届かない。過ぎ去った遠い過去のことなのに、決して色褪せない思い出として今もこの場に留まり続けるのだ。

「確かに戻ることはもう無理だな。あいにく、この世界にはドラえもんはいないし、四次元ポケットもない」

「……」

「だったら、また作ればいいじゃないか。かけがえのない思い出とやらをな。俺と、セナと3人で」

「うん……ありがとっ」

堪えていたものが爆発したみたいで、繭は声をあげて泣いた。ひたすら泣いた。
過去に何があったのかは分からない。
きっと、それは繭にとって、この上なく美しいものだったのだろう。
だからこそ、それを失ったことが辛いんだ。
これ以上、掛ける言葉が見当たらなかった。
俺にできることと言えば、こうして胸を貸すことぐらいだ……。

見上げると、そこには十五夜月が輝いていた。

三日目「幻想光景」―4

闇夜を一筋の月光が照らす。
それに先導されるようにして、帰路へと着く。

セナは俺の背中に負ぶわれながら眠りに付いている。その寝顔は、なんとも幸せそうだ。
名前を呼んでみると、ウンともスンとも言わない。
今度は頬をつついてみる。
相変わらず、反応は何もなし。
なんだか、微笑ましい。そんな姿を見て、繭と2人で笑いあう。

……

……

さっきいた商店街へと戻ってくる。

昨日別れた場所で、セナを繭に引き渡す。
繭が「じゃあね」と微笑みを浮かべる。

――そのときだった。

ふと思い出した。ずっと、頭の片隅に引っかかっていた疑問を。
それは、俺が初めてこの2人に会ったときから不思議に思っていたことだ。
ずっと聞こう、聞こうと思っていて、すっかり忘れていた。
それを今、繭に投げかける。

「なあ、聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「うん。何？」

「お前らさ、一体どこに住んでるんだ？一緒に住んでるのか？」

「うん、今は一緒に住んでるよ」

なるほど。だから、２人はいつも一緒なわけか。

「もう一つ、いいか？」

「うん」

「どうしてこの町に戻ってこようなんて思ったんだ？やっぱ、あれか？懐かしい思い出に心惹かれてか？」

「まあ、そんな感じかな。それとね……、最後に見ておきたいと思ったの」

「……最後？」

「わたし、あと少ししたら遠くの国に行くの。そしたら、もう帰ってこれないから……。だから、最後にわたしの生まれ故郷を目に焼き付けておきたいなって」

そうだったのか……。

繭が時折見せる悲しげな表情の、本当の意味が分かった気がする。

いろいろな想いが交錯しているんだな、繭の中で。

「そうか……。それで、いつなんだ？旅立つ日は？」

「……5日後。ちょうど、あの木が切り倒される日と同じ日……」

そうして、再び悲しげな表情を見せる。

そのとき俺は一つの決意を胸に秘めていた。

だが、時間は、もうない

はたして、出来るのか？

……分からない。でも、やるしかない。

繭のために。セナのために。そして、俺自身が過去と決別するために……。

自然と言葉が口をついて出ていた。

「作ろうぜ」

「え？」

「さっき、約束しただろ？あの言葉は嘘じゃない。時間は限られてるけどさ、これから3人で作ろう！かけがえのない思い出とやらをな」

「……うんっ」

そして、俺らの思い出作りの日々が始まった。

四日目「聖櫃」―1

気がつくと、床の上で大の字になって天井を仰いでいた。
状況が掴めない。
一体俺はなぜこんな格好で床に寝そべっている？
上半身を起こし、辺りを見渡してみる。
洗面用具が床一面に散らばっていた。中には、盥までもある。
「はぁ……？」
思考が錯綜する。
そういえば、額の部分がズキズキと痛む。
単なる頭痛ではなく、何か硬いもので思いっきり叩かれて、それがずっと尾を引いているような感覚だ。
おそるおそる、その痛みのする部分に触れてみる。
「……いたっ」
コブができていた。それも、とびっきり大きな。
不自然だ。偶然できたものとは考えにくい。
やはり、何者かに鈍器のようなもので殴られたことに間違いないようだ。
だが、ここは自宅だ。
自宅で暴漢に襲われる可能性があるとしたら……
強盗か？

いや、それはない。
常日頃から、施錠はしっかり行っている。
じゃあ、なんだ？
一体、何が起きたというんだ？
ううむ……。
記憶の糸を手繰る。

最古の記憶は、えぇっと……。商店街で繭たちと別れたときだ。
あの後どうしたんだっけか……。
……そうだ、あのままっすぐ家には帰らずに、しばらく町をぶらつくことにしたんだ。
気の向くままに、町を彷徨って……いつしか自然と、いつものあの場所へと向かっていた。

（どうしてかなあ。なんでいつも、この場所を訪れてしまうのだろうなあ……）

歩きながら、そんなことを考えていたと思う。
そのときだった。
奥の方に蠢く人影らしきものが２つ、視界に飛び込んできた。

（こんな時間に一体誰だ？）

目を凝らし、それを見つめる。

（……！）

我が目を疑った。

なんと、繭とセナが大樹の下でうずくまっていた。
一体、どうしてだ？さっき別れたばかりなのに。
近寄り、声をかけてみる。
すると、繭が大そうびっくりした様子で顔を上げた。

話を聞く。

……どうやら、今夜泊まる宿が見つからなかったらしい。それで、ここで一晩明かすことにしたと。
なるほど。
だが、女の子2人での野宿は危険だ。
いくらここが過疎地とは言え、暴漢に襲われる可能性もないとは限らない。
だから、思い切って打診してみた。俺の家に来ないか？と。
決して下心なんてないぞ！うん、多分。
最初は判断に迷っていたみたいだった。
そりゃ、そうだろう。つい数時間前に、どさくさにまぎれてオッパイ揉んだばかりだからな。
俺の信用は地に堕ちていた。クソ！
だが、しばらく考えて、それが最善の策だと思ったのか、しぶしぶと応じた。

「……ありがとう。でも、変なことしないでよねっ」

念を押された。
大丈夫、安心してくれ。決してお風呂に入っているところを覗いたり、下着を盗んだりなんてしないから。

ま、そんなこんなで、俺の下宿先のアパートへと三人で出向いたわけだ。セナは俺がおんぶして。

……ここまではいい。うん、ここまでは。だが、これだけでは合点がいかない。
どうして俺だけがこうも無残な姿で床に寝そべっているんだという最大の謎の解明には至らない。
――さらに記憶の糸を手繰る。
「……きったなっ！！」
口を手で押さえ、まるで汚物でも目にしたかのように顔を歪ませる繭。
足元には、ゴキブリの死骸が転がっていた。
そういや、長いこと放置しっぱなしだった。
「おお、悪い、悪い」
それをティッシュで包み、取り除く。
「いや……、ゴキブリもそうだけど、部屋全体が汚いっ！人間が住む環境じゃないわ！」
口を手で押さえ、わらわらと震えている。
「まぁ、でも一人暮らしの男の部屋なんて普通はこんなもんだぜ？」
そんな微笑ましい会話を交わしつつ、寝室へと案内する。
そのとき、繭の足に何かが引っかかたみたいで、それがドサドサと雪崩のように崩れた。

「きゃぁっ」

床に散らばった大量のエロ本。それを目にした繭が、息をのむ。

「な、、なによ、これ！常軌を逸する量だわ！」

「あ、ああ、これか。これは研究資料だ。女体学について研究しているんだ」

「嘘おっしゃい！この……ドスケベ！」

……タイトルが「巨乳」などといった露骨なものばかりで、妙に気まずい。

こうなったら、さっさと話題を逸らしてしまうに限る。

「まあ、少し汚いかもしれないけどさ、広さ的には申し分ないだろ？ちゃんと3人、寝れるスペースはある」

「うん、まあ、広さ的には大丈夫だけど……」

そういえば、背中にずっとセナを負ぶったままだった。

一旦、繭に預け、布団を敷く。

そこにセナを寝かせ、その横で再び繭と雑談を続ける。

「一人暮らしなの？」

「ああ。今は、親元を離れて一人で暮らしている」

「大変でしょ？」

「いや、そうでもないよ」

……

……

「ところで、シャワー浴びたいんだけど、貸してもらってもいいかしら？」

願ってもない、ビッグチャンス到来ッ！

「どうぞ、どうぞ、こちらになります」

はりきって案内する。気分は遠足前の小学生のような感じだ。

「なーんか、すごいハイテンション……」

「いや、気のせいだと思うぜ？ゆっくりとくつろいでおいで」

訝しげな視線を俺に送りながら、一人浴室へと入っていく繭。

ふふ……。

ついに……ついにだ。ついに、このときが来た！

これはもう、神からの思し召しに違いがないッ！

心は既に決まっていた。

……覗く他ないだろう！男としてな！

この機会を逃したら、バチが当たるわ！

据え膳食わぬは男の恥！いや……、これとは、ちょっと意味が違う

か。だが、まあいい。

……

……

繭が浴室に入って１０分が過ぎようとしていた。
時は満ちた。
きっと最初は警戒しているだろうから、あえて時間を空けたのだ。
気配を伺いつつ、おそるおそる中へと進入する。

どうやって覗くのかって？
こんなこともあろうかと、浴室にちょっとした仕掛けをしておいたのだ。
浴室との壁の間にある僅かなスペース。
そう、ここから覗けば繭のあんな姿やこんな姿が見れてしまうというわけだ！
というわけで、覗く。何の迷いもなく。

――そこには女体の神秘があった

「これぞ……Ｆカップの真髄っ！」

３つ目の幻想光景。

（実に素晴らしい……っ！グラマラス！ビューティフォー！）

一人、小声でそう叫び続けた。
だが、至福の時間は長く続かない。

「……！」

視界が暗転した。何かのノズルのようなものが一瞬見えたと思うと……、

「ぎゃあああああ！」

突如、噴射された液体で目が潰れた。

両手で目を押さえ、そのまま床へと倒れる。

「やっぱり！油断も隙もないんだから！」

くそ……、計画は失敗した！

だが、一瞬でも繭の裸体を見ることができたので良しとしよう。

最後に、戦利品としてパンツでも取って帰るか。

洗濯籠の中を漁る。

よおし、あったあった、これだ。夢が膨らむぜ～。

頭に被ったり、匂いをクンカクンカしたりして堪能。

すると……

「あれ……？ここ、どこ？」

セナが目を覚ました。目を擦りながら、こちらに向かって歩いてくる。

まずい……。手に持った『それ』を、後ろへ隠す。

「ねぇ、何隠したの～？セナにも見せて～」

「やめろ……これは、俺の大事な研究資料……」

「ケンキュウシリョウって何～？？」

「ひ、ひいいいい」

「……へえ～、ないと思ったら、やっぱりあんたが持ってたんだ」

後ろの方で声がした。
殺気で身の毛がよだつ。
もしやこれは、最も恐れていた事態……か？

振り返ると、バスローブ姿の繭が、ぷるぷると震えていた。

時が一瞬止まったような気がした。

「このバカアアアアア！！！！」

繭が顔を真っ赤にして叫ぶ。

同時に、盥が宙を舞った。

そしてそれは俺の額を直撃して……

そのまま、気を失った。

……

……

「ふ……そういうことか。やっと思い出したぜ、全てを」

事の顛末に加え、繭の胸の形もパンツの感触も全て思い出した。
寝室を見ると、繭とセナが互いに抱きしめあうようにして寝ていた。
なんだか萌える……。
その横で、大の字になって、再び眠りについた。

朝、目覚めると、部屋が綺麗に片付いていた。
きっと、繭が片付けてくれたんだろう。
非常にありがたい。ありがたいんだが、気になる点が一つあった。
俺の大切な大切な宝物たちの所在は……？
キッチンにいる繭に訊ねる。

「ふんっ」

怒っていた。
何度話しかけても、反応なし。

「怒らしちゃったね～」

セナがニコニコと笑いを浮かべる。

「あぁ、どうやら今日は厄日らしい……」

食卓の上に、おいしそうな料理が並べられていく。
聞くと、繭が全て作ったとのこと。
味見してみる。
うまい。

「こんなレシピ、どこで覚えたんだ？」
「え？この料理を作るのはこれが初めてよ？積み上げられていた本の中にあったこの教本の通りに作ってみたの」
教本……？ああ、高校のときの家庭科の教科書か。
「ところで、それ以外の本たちはどこにいったのかな……？」
「捨てたわよ」
キッとした目つきで、睨み付けられる。
「あれは……あれは、俺の大切な……」
「大切な何なのよ？」
「……研究資料」
繭とセナと俺の三人で食卓を囲う。
「なんか……こうして見ると、家族みたいだな」
「家族？」
セナが、きょとんとした目でこちらを見る。
「ああ。繭が妻で、セナが娘」
「む……セナ、子供じゃないもんっ」

「いや……どうみても、子供だから」
「子供じゃないもんっ、子供じゃないもんっ」
ポカポカ叩かれる。
「あー、わかったわかった。セナは子供じゃないよ、大人だ」
納得できないといった様子で、頬をぷくーっと膨らませるセナ。
「ところで今日さ、あの山、行って見ない……？」
繭が切り出す。
「あの山？」
「うん。以前わたしたちが始めて会ったあの丘の横に、もうひとつ丘が連なってたでしょ？そこから、通じる山」
「そこに何があるんだ？」
「そこに遺跡があるの。そこも、わたしにとって思い出の場所なの。だから、行ってみたいな」
「ほお。初耳だな。じゃあ、行ってみるか！」
「セナ、どうだ？遺跡だぞ遺跡」
「……子供じゃないもんっ子供じゃないもん」

いじけていた。

四日目「聖櫃」―2

支度を済ませ、アパートを出る。
忘れ物はないかと、再度荷物の中身を確認する。

「案外、心配性なんだね、おにーさん」

セナが言う。
なんせ山越えだからな。
万が一のときのためにも念には念を入れておく。

「よし……！」

深呼吸し、さあ、いざこれから出発となったそのとき。セナが突然、何かを思い出したように声を上げた。

「あ、そうだ！」
「ん？どうした？」
「あの狐さんたち、大丈夫かな？」

昨日の狐だ。

「ねえねえ。先に狐さんたちの様子、見にいこーよ」

セナが、くいくいと俺の服の裾を引っ張る。
確かに、一度様子を見てからでも遅くはない。
まあ、大丈夫だとは思うが、外敵に襲われて傷口が広がっていたりしたらまずいしな。

「ああ、そうだな。じゃあ、遺跡に向かう前にあいつらの様子を見ていくか。繭、いいよな？」
「そうだね。わたしが手当てしたんだから、気になるし」
「よし、じゃあ行こう」

◆□◆□◆□◆□◆□

夜の幻想的な雰囲気とは打って変わって、平淡とした野原が広がっていた。
こうも朝と夜とでは雰囲気は違って見えるものなのか……。
狐たちを探す。
ケガをしているので、あまり遠くには行っていないはずだが……。

「あ。あれじゃない？」

繭が指差す。
草薮のかげに、影らしきもの。
見ると、案の定、あの二匹が寄り添うように座っていた。

「どうだ？繭」

傷痕を一瞥し、繭に問いかける。

「うん、大丈夫みたい。傷も治りかけているわ」
「そうか。それは良かった」

こうして狐を優しく看取る繭のその姿は、まるで天使のように見えた。
なんだろう。ハートがズッキューンと来た。

「なあ、繭」
「なに？」
「繭って、何気に慈愛に満ち溢れているよな」
「え？」
きょとんとした顔でこちらを見つめてくる。
「いや、そういうの良いと思うぜ」
「そ、そうかな？」
照れくさそうに微笑みを浮かべる繭。
「なんかさー、おにーさんが言うと、なんだかエッチっぽい」
セナが余計な横槍を入れてくる。
……ったく。
なんて人聞きの悪いことを言いやがる。
まるで俺が変態であるかのようじゃないか。
「いや、俺の気持ちは純粋だぞっ！やましい気持ちなんてこれっぽっちもないっ」
「昨日、パンツ盗んで返り討ちにあったくせにっ」
うっ……。
「い、いや、あれは……その」
魔が差したんだ、あれは。
ジェントルマンたる俺の理性を狂わせるとは、恐るべし……！Fカ

ップの魔力。

◆□◆□◆□◆□◆□

「じゃあ、行くか」

「おー！」

セナが、張り切って声を上げる。

「よし、まずは、いつものあの丘に向かおう。そこに分岐点がある」

「そこから、山を越えていくんだよね？」

「ああ、そうだ」

「うわー、骨が折れそうだね～。でも楽しそうっ！」

気分はうきうきのセナ。

「わたし大丈夫かなあ……」

方や、言いだしっぺなのに、自分の体力が持つか心配する繭。

「まあ、それほど高い山ではないぜ。ひとつ登りきったら、あとはそれに沿って縦走していくだけだから見かけよりはだいぶ楽だと思う」

◆□◆□◆□◆□◆□

「おいセナ、一人で先に進むな。危険だから」

「どうして～？」

「ここには吹き抜けがたくさんあるんだよ」

役所の怠慢で、未だにここは整備が行き届いていない。
「別に大丈夫だもんっ、セナ落ちないもん」
強がるセナ。
「とかいいつつ、この前落ちただろ？俺が下にいなければ、今頃は木っ端微塵だぜ？」
「そんなにセナのことが信用できないんだ！」
「できない」
当たり前だ。
「む～っ」
頬をぷっくりと膨らませる。
「いいもん！セナ、ひとりで行くもんっ」
そう言い捨てて、一人でさっさと進んでしまうセナ。
やな予感がするので、俺も慌ててその後ろにつく。
「どーして、おにーさん、ついてくるの？」
「セナが心配だからだよ」
「別に大丈夫だもん！セナ、こうみえても大人なんだから！だから……」
そう言い掛けたときだった。
「あっ……！」

案の定、吹き抜けに足を取られた。
特に驚きもしない。こうなることは既に予測済みだった。
サッとセナの手を取り、こちら側に引き戻してやる。

「……ほら、だから言ったろ？」
「……うん」

◆□◆□◆□◆□◆□

丘を抜け、山道へと至る。
特に険しいわけではなく、緩やかな坂道が延々と続いている。
その坂道を、セナが、きゃっきゃとはしゃぎながら駆け出していく。

「おい、セナ。あまり、最初から飛ばしすぎるなよ。後から辛くなるから」
「そうなの？」
「ああ。山登りは最初に体力を温存しておくことが鉄則だ。繭を見てみろ。ちゃんとセーブしてるだろ？」

俺たちの遥か後ろの方にいる繭に顔を向ける。

「2人とも早いよ……」

繭が、息を切らしながら歩いていた。

「あ、セーブしているわけじゃなかったのか……」

◆□◆□◆□◆□◆□

ようやく山頂に到達。
歩き始めて二時間あまりが過ぎようとしていた。
だが、これでゴールではない。
ここからは山頂づたいに山々を縦走していく。

「なあ、繭。あとどれぐらいだ？」
「あと、もう少しかな……」

もう少しと言われても、具体的にあとどれぐらいかかるのかが分からない。

「一時間ぐらいか？」
「うーん、それぐらいかな？」

なんとも曖昧な答えだ。まあ、いい。それにしても腹が減った。

「どうする？そろそろ休憩といくか？」
「うん。じゃあ、そうしよっか」

辺りをざっと見渡す。
下界の景色を一番よく見渡せる場所はどこだろう……。

ううむ。あそこら辺が、一番適しているかな。
よし。
持ってきたシートを広げ、三人で腰掛ける。

「じゃじゃーんっ」

上機嫌の繭。
リュックサックの中から、弁当箱を取り出す。

「ほぉ、うまそうだな」
「繭、料理作るの上手だよね～」
セナが、弁当箱を見つめながら、フンフンと感心している。
「そうかな～」
照れる繭。
「繭は料理の才能があると思うぞ」
「もう～っ！」
なんとも嬉しそうだ。
繭の可愛い一面を垣間見た気がする。
面白いので、さらにお世辞を続けてみることにする。
「まさに良妻賢母ってやつだな。料理も上手で慈愛に満ち溢れていて、そのうえ胸も大きいときた。まさに非の打ち所なしだな！」
「……。胸が大きいは余計」
「まあ、怒るな。褒めてるんだから」
「おにーさん、そういうのセクハラって言うんだよー？」
セナが鋭い指摘をする。
確かに俺の一連の発言を裁判沙汰にされたら、少々やばいかもしれない。
だが、これだけは言いたい！
巨乳は正義である！巨乳を愛さない男など、この世にいるはずがない！
繭のボンキュッボンな体型は男にとっての理想郷であり、もはや奇

跡による産物にしか思えないのである。
一方、セナはと言うと……。

「……何、じろじろとセナのこと見渡してるの？おにーさん」
「セナは後１０年だな」
「え？」
「１０年後に期待しよう」
「どういうこと？」

言っている意味が分からないとばかりに、きょとんした目でこちらを見つめてくる。

「いや、なんでもない。気にするな」

セナのぺったんこな胸が、いつしか巨乳になる日を夢見て。

「気になるっ」
「まあ、繭のように上品でおしとやかな女性を目指せということだ」
「セナだって、ジョーヒンでオシトヤカだよ？」

おいおい、意味が分かって言ってるのか。

「ぷっ……！」

思わず、吹き出してしまう。

「あー！今笑った！」

セナが今の姿のまま、上品でおしとやかだったら逆に不気味な気がする。

「ごめんごめん。１０年後は、きっとグラマラスな女性になるぜ。そのときは、ぜひともその巨乳を触らせてくれよな」

「なに言ってんの、いっやらしっ」

「巨乳は人類の宝なんだから、それを共有するのは当然だろ。それにな……」

「それに？」

「（繭は触らせてくれないんだよ）」

セナに、そっと耳打ちする。

「だから、そういう意味でもおおらかな女性になれ」

と、そのとき。何者かに首根っこを掴まれた。

首の骨がバキバキと鳴る。

「ぎゃあ！」

「いい加減にしないと、ここから突き落とすわよ？」

振り返ると、怒りに満ちた表情の繭がそこにいた。

「俺がわるうございました。それだけは勘弁……」

……

……

「セナ。にんじんもちゃんと食え」

「だって……、セナ、にんじん苦手なんだもん」

スプーンでそれを端へと追いやる。
「こう見えて、栄養価はまあまあるんだぞ。ほれ、食ってみろ」
端に追いやられたそれを、セナの口に持っていく。
「ん〜〜〜！」
一噛み。また一噛み。
セナの表情が、だんだんと歪んでいく。
「にがーいっ」
「これも大人な女性を目指すための第一歩だ。頑張れっ！」
「……大人な女性？」
「ああ、そうだ。繭のような大人な女性になるんだろ？大人の女性なら、これぐらいのこと平然と乗り切らないとな」
「……うんっ、頑張る！」
何かを悟ったようで、次々とにんじんを口に放り込んでいくセナだった。
その表情が苦悶に満ちていたことは言うまでもない……。
「な、単純だろ？」
隣にいる繭に耳打ち。
「セナ、純粋だからねえ……」
……

……

「あーうまかった」

満腹だ。

「おいしかったよっ、繭」

セナも満足のようだ。

「うん、ありがとうっ。手によりをかけて作った甲斐があったわ」

「よし、じゃあ行くか！」

◆□◆□◆□◆□◆□

山頂づたいに縦走を続ける。

登ったり、降りたりを繰り返す。

やがて、霧のかかった場所に出た。

それは俺らの姿を完全に包み隠してしまった。

「よく見えない……」

霧の中で、セナがうろたえる。

「……繭、本当にこっちの方向でいいのか？」

「うん、大丈夫」

姿は見えないが、声だけが聞こえる。

一帯からは、不穏な雰囲気が漂っていた。

なんだか、この先に進むのが憚れた。
「繭、先いっちゃったよ～？」
先の方に人影らしきものが見えた。
ここで立ち往生していても仕方がない。
「俺らも続こう」
しばらく進むと、繭が足を止めた。
「……ここが、その場所なのか？」
「うん」
霧がだんだんと晴れていく。
「これは……」
明らかに、この光景は異質だった。
まるでタイムスリップでもしたかのような……。そんな錯覚に囚われる。
それも無理もない。
目の前には、古代の時代に築かれたと思われる建造物が聳えていた。
おそらく、ここが繭の言っていた遺跡なのだろう。
日常とは掛け離れた光景。
だが、見覚えがあった。
実際に見たわけではなく、一度何かの書物で目にしたような……

「なあ。これって、もしや……？」
「うん。生贄の儀式で使われた祭壇よ」
やはり、そうか。
「……生々しいな」
祭壇の頂上に立ち、下界の景色を見下ろす。
「なあ……本当にここが繭にとっての思い出の場所なのか？」
「うん」
何の迷いもなく頷く。
……いや、おかしいだろ。
だって、ここは何人もの人が死んだ場所だぞ……？
なのに、思い出の場所って、どういうことだ？
思い出になるほどの何かが、ここであったということか？
疑問だ。
だが、そんなことをいちいち詮索したところで、しょうがない。
しばらく繭の様子を見守ることにする。
繭は何かに思いを馳せているようだった。
首にかけた首飾りを手に取ると、それをやさしく手で撫で始める。
「その首飾り、大切なんだな」
「うん……大切」
小声でそう呟く。
なんだか、俺がこの場に居続けることは野暮なように思えてきた。

しばらく一人にしてあげた方がいいかもしれない。

「俺は下に行ってるから」

そう繭に告げ、背を向ける。

繭がどんな思いでこの場所を訪れたのかは分からない。
分からないから、なんとも言えない。
だが、なぜだろう。
繭がまるで遠い世界に行ってしまったかのように感じられた。
そう、俺が手を伸ばそうと決して届かない、触れることさえもできない世界に。

階段を下りると、セナが迎えに来ていた。

「ねえねえ、ちょっとこっち来て」

「どうした？」

セナに手を引かれ、着いた先は一面に広がる花畑だった。

「ほう……これはすごいな」

その光景に圧倒させられる。

「この花さ、繭の首飾りに使われているのと同じ花じゃない？」

……たしかに、そうだ。着眼点がいいな、セナは。

「……なるほど、そういうことか」

突如、閃いた。

「え？」

「繭のお友達とやらは、ここに植えられてる花で首飾りを作って繭にプレゼントしたんだ、おそらく」

「なるほど～。だから繭は、ここに行こうっていったんだ」

「おそらくそうだろう。……ん？いや、ちょっと待てよ」

よく考えれば、それだけでは説明できない部分がある。

繭はこの花畑に思い入れがあるというより、あの祭壇に思い入れがある感じだった。

ううむ……分からない。

謎は深まるばかりだ。

「それにしても、綺麗な花だね～、なんていうの？」

ひとつ、手に取り、その表面を見つめる。

「……分からん。一見、シロツメクサのように見えるが……少し違う。なんだろうな。不思議な花だな」

「このお花で首飾り作ったら、きっと可愛いんだろうね～」

「ああ、おそらくな」

「だったらさ、セナにも首飾り、作ってよ？」

目をキラキラ輝かせながら、俺の顔を見つめてくる。

「ん～。また今度の機会にな」

「む～」

そんな会話をセナと交わしながら、花畑を歩いていた。

そして。
ふと、セナが立ち止まり、一点を指差す。
「あ、あの丘が見えるよ～？」
セナの指差した先を見る。
「ああ、願いの丘か」
「願いの丘？」
「ああ、俺が勝手にそう名づけたんだ？しっくり来るだろ？」
「うん。いいね！じゃあ、これからはそう呼ぼう！」
◆□◆□◆□◆□◆□
「……繭、なかなか降りてこないね……どうしたんだろ？」
あれから３０分あまりが過ぎていた。
得体の知れない焦燥感が身を駆り立てる。
「ちょっと様子見てくるわ」
そう言い、駆け足で階段を登る。
「……！」
うずくまって泣く繭の姿が目に飛び込んできた。
「どうしたんだよ、繭？何があったんだ……？」
「あ、、うん、ごめんね。いろんなこと思い出しちゃった」
「……まあ、泣いてスッキリするならいいけどさ」

手を取り、支えるようにして繭の体を起こす。
驚くほど、その体は軽かった。

「繭……」

やがて、セナも合流した。

「……繭。どうしたの？」

繭の泣きはらした顔を見て、うろたえるセナ。

「うん、なんでもないよ、待たせてごめんね」

さっきまで泣いていたことをセナに悟られないように振舞う。
その姿が、俺にはとても痛ましく感じられた。

「セナ、ちょっと下行ってろ」
「え？う、うん」
「……なあ、繭？」
「……」
「辛いことがあるならいつでも言えよ。まあ、無理して言えとは言わないが……。俺でよければ、いつでも力になるから」
「うん。ありがとね……。その気持ちだけでも嬉しい」
「ああ。じゃあ行こうか。下でセナが待っている」

四日目「聖櫃」―3

「繭……大丈夫？」

下で待っていたセナが心配そうに繭に問いかける。

「うん。大丈夫。心配してくれて、ありがとう」

気丈に振舞う繭。

その目には微かに涙が滲んでいた。

だが、それは先ほど祭壇で見せた涙ではない。明らかに、今この瞬間に湧き出てきた涙だった。

ああ……。お前ら、本当に気心知れてるんだな。

来た道を引き返す。

一度通ってきた道なのに、不思議と長く感じられた。

一歩一歩が重い。

「そろそろ半分来たかな？」

セナが疲れきった顔で言う。

「まだまだだ。三分の一も来ていないぞ」

「セナ、疲れたよ……」

「おんぶしてやろうか？」

「いいっ」

顔を赤くして照れるセナ。

「おんぶしてやるよ。ほら、来い」
「いいっ。セナ、そんな子供じゃないんだから！」
頬を膨らませ、抗議するセナ。
いつの日だったか、お前が眠りについてしまったときに俺が背中に負ぶって家まで連れて帰ったときのことを忘れてしまったというのかい？
……
……
さっきまで澄み渡っていた青空に暗雲が立ち込める。
一つ、また一つとそれは数を増していき……
いつの間にか、周囲は暗く、淀んだ空気に包まれてしまった。
「やな天気……」
セナが空を見上げながら言う。
「まずいな……」
ポツポツと水滴が頬に当たる。
ついに、振ってきやがったか……。
リュックサックを地面に下ろし、中を探る。
「おにーさん、雨具持ってきた？」
空を見上げていたセナが俺の方に顔を向ける。

「いや、それをさっきから探してるんだが、見つからない」
「もう！家でるときに、あれだけ念入れて確認してたのにっ」
滴る水滴が徐々に勢いを増していく。
その間に思考を挟む隙は、ほとんどなかった。
あっという間だった。
土砂降り雨が俺らを襲う。
「どうしよ、どうしよ」
雨に打たれながら、うろたえるセナ。
「落ち着け。策を考える」
……とりあえず、一時的にでも雨を凌げる場所。
……屋根のあるところに行こう。
例えば、小屋とか洞窟とか。
だが、この辺りにあるかな……？
記憶を振り返っても、そんなものがあった様子はない。
ううむ……。
思考を巡らす。
と、そのとき。
繭が、ふと何かを思いついたように声を発した。
「そうだ……この近くに神社があったはずっ」
ナイス！繭！
「よし、そこで雨宿りだ。走ろう」

繭に案内され、走り出す。
走っている間も、雨は勢いを増していく。
時間にして、おそらく3分もなかっただろう。
着く頃には3人とも、すっかりびしょ濡れになっていた。
境内の階段に腰掛け、雨が止むのを待つ。
「やまないね……」
繭が不安そうに空を眺める。
「天気予報では晴れだったのにねー」
セナが言う。
「まあ、山の天気は変わりやすいっていうからな」
とは言っても、ここまでの豪雨になるとは思ってもいなかった。
通り雨であることを願うが……。
「それにしても、この神社って何だろう？」
セナが辺りを見渡しながら言う。
「どうやら、山の神様を祀っているようだな……」
「この前言ってた、ひとたび逆鱗に触れると、大災害を引き起こしたという？」
「ああ。そのようだ」
――突如として、鳴り響く轟音。

「きゃあ！」

雷だ。

繭が悲鳴を上げ、震え上がる。

「近くに落ちたな……。それにしても、すごい音だな……」

だが、感心してもいられない。

近くに落ちたということは、ここに落ちる可能性だって充分にあるのだ。

どうするか……。

どうしようもない。

ただ、運を天に任せるしか……。

と、そのときだった。

「……？セナ？」

セナの様子がおかしい。

ある一点を、じっと見つめていた。

「おい、どうした？」

返事はなかった。

無言で、それに吸い込まれるように駆け出していくセナ。

「お、おい。待て、セナ！」

セナが雨の中に消えた。

「どこ行ったんだ、あいつ……」

◆□◆□◆□◆□◆□

■セナ

「ルナ……ルナなの？」

気配のする方向に向かって問いかける。
すると、それは姿を現した。

「あら。まだここにいたわけ？いい加減、あるべき場所に帰ったらどう？」

淡々と言い放つ。
いつだってルナは、こんな調子だ。
何事にも冷めていて、自分から何かに興味を示すことなんて滅多にない……。

「いや。だって今は楽しいもん」

きっぱりと断る。
ルナに何を言われようが、これだけは譲ることはできない。

「辛くなるだけよ？それは分かってるの？」
「分かってる」

最初から、その覚悟はあった。

「へぇ……本当に分かってるのかしらねえ。泣き虫のあんたが。それとも、あの男に同情でもした？」
「違うよ。そんなんじゃない」
同情したというより、熱意に心を打たれたという感じかな……。
でも、今となってはそんな昔のことどうだっていい。
「一方的に約束を破ったのはあの男なんだからね。同情なんかする必要ないわ」
「だから違うってば。セナにとっても、このことはずっと前から願っていたことだったの。誰が良いとか、悪いとか、そんな問題じゃないよ……」
「そう？なら、いいんだけどね」
「ルナ……。いつまで強情張ってるの？もっと自分に正直になったらどう？セナには、なんとなく分かるの。ルナだって、本当は……。」
そう言いかけたときだった。
ルナの表情が変わった。
「……っ！強情なんて張っていないわ！何よ……ちょっとばかり自由になれたからって、バカみたいに浮かれちゃって！」
「別にそんなわけじゃ……」
「もう勝手にすれば！それで苦労するのは、あなたなんだから！」
背を向け、この場から立ち去ろうとする。
「待ってよ、ルナ！」
「……」
「ルナも仲間に入ろうよ？きっと、楽しいよ」

「バカじゃないの！どうしてそんなこと……。いやに決まってるじゃない。どうして、あたしが……」
「ルナ……」
「あなたがどうしようがあなたの勝手。あたしが今こうしてあなたに忠告していることは、余計なお世話なのかもしれない。でも、これだけは覚えておいて。いつか必ずそのときは訪れる。泣こうが喚こうが、必ずね」
「分かってるよ……そんなことくらい。セナだって子供じゃないんだから」
「そのとき、あなたは後悔しない？こんな思いするくらいだったら、最初から何も知らなかった方が良かったなんて思わない？」
「思わない……思わないよ。絶対」
「そう。なら、いいわ。もうこれ以上何も言わないわ。ひとまず、さようなら。そのときが来たら、また会いましょう」
「うん。ルナも、どうか悔いのないようにね？」
「ありがとう。それじゃ」

そう言ってルナは雨の中に消えていった。

「もう……強がりなんだから……ルナは」

いつの間にか雨は止んでいた。
再び、境内に戻る。
おにーさんと繭が、心配そうな顔を見て、こっちに向かって駆け出してきた。
どうしたんだろう？そんなに血相変えて？

「……どうしたんだ？セナ？どこ行ってた？」
「ううん。なんでもない」
「なんでもないってわけないだろ。ほら、びしょ濡れじゃないか…

…風引いたらどうすんだよ」
普段は子供だとか言われて馬鹿にされてるけど、きっと本心ではセナのこと、妹のように思ってくれているんだと思う。
だから、ありがとね……。
「大丈夫大丈夫。もう雨も止んだみたいだし。そろそろ出発しよっ？」
「ったく……」
こんな日常が、いつまでも続いたらいいのになぁ……。
◆□◆□◆□◆□◆□
一面の夕焼け空。
カラスの鳴き声が、どこからともなく聞こえてくる。
ああ、もうそんな時刻か。
……長旅だった。
最後の力を振り絞って、部屋の扉を開ける。
「あ～、つかれた～」
もはや立っているのがやっとだ。
俺のライフゲージはゼロ。
「もうクタクタ……」
セナがその場になだれ込む。
「ふう……」

息を切らしながら、セナの隣に腰掛ける繭。
「汗かいちゃった……。ねえ？シャワールーム貸してもらっていい？」
「ああ。どうぞ」
「ありがとう。……でも、昨日みたいに変なことしたら承知しないから」
睨み付けられる。
どうやら俺には変態のイメージが根付いてしまっているようだ。
「安心してくれ。俺はジェントルマンだ」

五日目「夢の時間」―1

突然襲った息苦しさで目を覚ます。
思いっきり咳き込んでしまう。

「なんだ……一体」

体を起こし、周囲を見渡す。
すると、台所の方から黒煙が立ち込めているのが見えた。

「……火事か？」

立ち上がり、恐る恐るその煙の方向へと足を進める。

「……！」

衝撃的な光景が飛び込んできた。
セナがエプロン姿で台所に立っていた。何やら料理らしきものを作っているようだ。
そしてグリルから黙々と吹き上がる黒煙。

「……お前は何をやってるんだ？」

恐る恐る問いただす。

「皆の朝ごはん作ってるのっ」

おいおい、何を言う。
この状況を理解していないのか。

「俺には黒魔術の儀式のようにしか見えないが……」
呆然と立ち尽くす俺など目にも留めていない様子だった。
ふんふんと鼻歌を交えながら、黒魔術の儀式を続けるセナ。
「そろそろお魚、焼けたかなあ？」
グリルから黒焦げた物体を取り出す。
「これは何だ……？」
「お魚だよ？ちょっと焼きすぎちゃったかなあ？」
もはや原型を留めていない。
「焼きすぎたなんてレベルじゃねーぞ！灰燼と帰してるじゃねえか」
「う～ん。じゃあ、もう一匹焼きなおす！」
冷蔵庫を開け、魚のパックを取り出そうとする。
「もういい！お前がやるとロクなことにならん！」
思わず、声を荒げてしまう。
セナの動きが止まる。
「……なんでそんな言い方するの？」
セナの顔から笑顔が消えた。
「当たり前だろ！あやうく一酸化炭素中毒で死ぬところだったぞ！

……もういいから寝てろ。後始末は俺がやっておくから」
今にも泣き出しそうな表情で体をぷるぷると震わせている。
そして声にならない声で叫んだ。
「……何よ、何よ！セナ、頑張ったのに！昨日繭が料理しているの見て、見よう見真似で頑張ったのに！」
そうして、顔を下に向けると、えぐっえぐと泣き始めてしまう。
……こうなったら、お手上げだ。
泣く子には敵わない。
「分かったよ、言い過ぎたよ。ごめんな。でもセナ。お前はまだ料理を作ることに慣れてないだろ？今度繭に教えてもらえ。な？」
「……うん」
なんとか納得してもらえたようで、後片付けを始めるセナ。
「もういいから。まだ朝早いだろ？寝ておけ」
「う、うん」
そうして、とことこと寝室に戻っていくのであった。
「はぁ……つかれた」
◆□◆□◆□◆□◆□
「へぇ、そんなことがあったんだぁ」
すーすーと寝息を立てながら眠るセナを横目に、台所で繭と会話を

交わしている。

「ああ。いきなり黒煙が立ち上がってるもんだから何事かと思ってびっくりしたぜ」

「セナ、好奇心が旺盛だからねえ……。なにかに興味を示したら、すぐに突っ走っていっちゃうから」

「片時も目が離せないよな。なんだか、できの悪い妹を抱えた気分だ」

繭がクスクスと笑う。

「セナが聞いたら、きっと怒るよ？でも、なんだかわたしたち、本当に家族みたいだよね」

「ああ。期間限定の家族だけどな」

「それにしても、不思議だよね」

「ん？」

「わたしたち、出会ってからまだ4日しか経っていないのに、ずっと昔から知っていたような感じ」

「奇遇だな。俺も、繭と初めて会ったとき、同じ気持ちを抱いた」

「そうなの？」

「ああ。もしかしたら、前世に深い係わりがあったのかもな？血縁同士だったとか？」

「まさか！」

繭が笑う。

俺も笑う。

日常の、ありふれた光景。

しかし、今の俺にとっては、それがこの上なく貴重なもののように思える。

……運命の日まで後3日。
その日、俺は、かけがえのない思い出を2つ同時に失う。
そのとき俺は何を思うのだろうか？

「なあ、繭」
「うん？」
「後3日したら、遠くの国に行ってしまうんだろ？もう戻ってくる予定はないのか？」

いつか戻ってくる。その答えを期待していた。

「ごめん……。戻ってくることは、もうないと思う」
「そうか……」

夢の時間は、あともう少しで終わる。

五日目「夢の時間」―2

三人で食卓を囲う。

「さて、今日はどこに行く？」

「そうだねー。遊園地なんてどうかな？」

俺の問いかけに繭が答える。

「遊園地か、それもいいな。よし、じゃあ今日の行き先は遊園地に決定だ」

と、ここでいつもならセナが張り切って返事をするはずなのだが、ぽかーんとしたまま動かない。

いまいち調子が狂う。

「セナ？どうした？嬉しくないのか？」

「……遊園地ってどんなところ？セナ、行ったことないから分からない」

セナは世間に疎い方だが、まさかここまで疎かったとは。

「うーん、まあ、いろいろな魅惑的なアトラクションがあってだな……。言葉では説明しづらいな。実際にこの目で見た方が早い」

「というと、楽しいの？」

「そりゃあもう！」

「なら行くーっ！」

……とまあ、そんなわけで、遊園地へと向けて出発する。

だが、その前に狐たちの様子を見に行く。なんだかんだで日課になってきたな。

「ほら、ほら、こっちこっち！」

セナが手を叩いて、合図を送る。
狐たちがこちらに向かって駆け出してくる。

「ほう、よく懐いたもんだな」
「そりゃあ、もう愛情込めてるもんっ」

と、ケガした方の狐を撫でながら、セナ。

「だが、一向に解せないところがある」
「ん？」

セナが俺の方を振り返る。

「なぜ、俺には懐かない……っ！」

魂の叫び。昔から俺は動物には懐かれない。
それどころか近所の凶暴な犬に威嚇されたり追い掛け回されたり散々だ。俺はのび太くんか！

「ぶっきらぼうだからじゃないかな？」

もう一方の狐の背中を撫でながら、繭がさりげなく言う。
ブロークンハート！
ここはオブラートに包んでくれ！

「そうか……俺はぶっきらぼうだったのか……」
その場に跪き、自身に課された運命を呪う。
すると、セナがこっちにやってきて、今度は俺の頭を撫で始める。
「大丈夫だよ？おにーさんっ！そんなぶっきらぼうじゃないよ？」
これは……慰めてくれているのか……？
こんな子供に慰められるなんて……恥ずかしいというか……だが、しかし悪い気はしない。
「ほら、なでなでしてみなよ？」
おそるおそる狐の背中に手を置く。
すると、恍惚そうな表情を浮かべて俺に擦り寄ってくる。
「き、奇跡が起きた！」
驚嘆！
「ね？ほら、簡単でしょ？」
セナがクスクスと微笑む。
だが、撫でるのをやめると、すぐにそっぽを向いて繭の方に駆け寄っていってしまう。
「まだまだだな……」
修行が足らんようだ。

◆□◆□◆□◆□◆□

三人で肩を並べ木陰に腰掛ける。
どこからともなく聞こえてくる蝉の声。
雲ひとつない晴天だ。朝の日差しが目に染みる。

「これだけ元気なんだ。ケガの方は、もう大丈夫そうだな」
「そうだね」

繭が頷く。

「繭のおかげだな」
「え？」

俺の方を振り返ると、きょとんとした表情。

「繭があれだけ親身になって治療したから、ここまで元気になれたんだ。もし俺とセナだけだったら、何もしてやれなかったと思うぜ。きっと、今頃感謝してるだろうよ」

そう言うと、照れ笑いを浮かべながら

「だと、嬉しいな」

繭は謙虚な性格だ。だが、どこか謙虚すぎる面もある。
だから、もっと自信を持ってもらいたかった。

「ああ。間違いなく繭のおかげだ。もっと自信を持て」

はっきりと言ってやる。

「……うんっ」

一瞬の沈黙の後、満面の笑みで頷いた。
よし、これでいい。

◆□◆□◆□◆□◆□

「これが遊園地？すっごおい！」

きゃっきゃとはしゃぎながら辺りを駆け回るセナ。
セナ、やはりお前はどこからどう見ても子供だ。
時にはその子供っぽさが羨ましい。

「いいよな、セナは。何に対しても純粋な目で見ることができて」
「え？」

繭が、きょとんとした目でこちらを見つめる。

「大人になると、どこか達観してしまうんだ。なんだかどこか冷めた目で見てしまうというか……。まあ、とにかくセナのような純粋な心は俺にはもうないんだ」
「そうかなあ？」
「いつか繭も分かるときが来ると思うぞ。まあ、まだ17歳だから、だいぶ先の話だけどな」

そう言って、ははは―っと笑う。

「……もしかしたら、わたしのことも子供だと思ってる？」
「いや、繭は17歳という年齢の割には、大人びていると思うぞ。

だから俺の気持ちが何となくでも分かるんじゃないかとも思って」
「もう……お世辞なんて言っちゃって！」
照れ笑いを浮かべる繭。
「でも、それって少しずつ心が汚れていくってことなのかな？」
「まあ、そういうことなのかもな。それが大人になるってことだ」
「なんだか寂しいね……」
「そんなもんだ。今を存分に楽しんでおいた方がいいぞ。心が純粋なうちにな」
「うん、そうだね」
セナの方に目をやると、相変わらず、きゃっきゃとはしゃぎながら辺りを駆け回っている。
「それにしても、セナってさ、本当に繭よりも年上なのか？どうみても子供にしか見えんが」
「うん。わたしより年上ってことは確かよ。年齢は分からないけどね」
「あれが繭より年上か……。俺には理解不能だ……」

五日目「夢の時間」―3

セナが、こちらに向かって駆け寄ってくる。

「ねえ、何やってるの～？中入ろうよっ」

「あ……ああ。そうだな」

心配な点が一つあった。

それは、財布の中身だ。

こいつらと出会ってからというもの、金が飛ぶようになくなっていく。

こうしてどこかに出かける際に払う金や、朝昼晩の飯代など、俺が全て払っているからな。

まあ、2人とも無一文だから、必然的にこうするしかないんだけどな。だから、まあ仕方がない。

でも不思議と悪い気はしなかった。

俺にできることなら、なんでもしてあげたいと思った。

そう、時間は限られているんだから……。

ゲートをくぐり、中へ入る。

「ねえねえ、あれ乗ろーっ」

セナがメリーゴーランドの方へと向かって駆け出していく。

「大丈夫か、セナ。一人で乗れるか？」

「む……。また子供扱いした」

「いや、万が一、落ちてしまったら大変だからさ」

「大丈夫だもんっ」

頬を膨らますセナ。
「そうね……じゃあセナ。わたしと一緒に乗ろっか？」
繭がセナの手を取る。
「あ～繭まで子供扱いした！」
「そういうわけじゃないよ。ただ、セナのことが心配だから……」
「余計なお世話っ！」
そう言い放つと、下を向き拗ねてしまう。
お前は駄々っ子か。
「そうは言うけどね……。ほらセナ、よく見てみて。結構な速さで回転してるでしょ？もし、そこから落ちちゃったら一溜まりもないよ？ちょっと擦りむいちゃった程度じゃ済まないよ？」
「落ちたりなんてしないよ……。何よ……繭まで子供扱いして」
酷く心外な様子のセナ。
「でもそう言って昨日も吹き抜けから落ちそうになったよね？そういうことがたびたびあるから、わたしはセナのことが気が気で仕方がないの。決して、セナのことを子供だとか、そんな風に思っているわけじゃないよ？万が一のときのことを考えて言ってるの」
「……」
実に筋の通った正論だ。
セナは顔を下に向けたまま、何も言い返せない。
さらに繭は続ける。

「もし、セナが落ちちゃって大怪我でもしたら、きっとわたしたち、自分のこと責めちゃうと思うの。なんで、あのとき一緒に付いててあげなかったんだろうって。だからお願いセナ。わたしと一緒に乗ろ？」

するとセナが下に向けていた顔を、おもむろに上げる。

「……うん、分かった。繭がそこまで気に掛けてくれているんなら……」

ネゴシエイト成功！

（……ナイス、繭！）

繭にグッドサインを送る。

微笑みを返してくる繭。

繭、お前は実にすごい。

俺には絶対にできない芸当だ。

きっと俺だったら無理やり頭から丸め込むような言い方になっていただろう。俺の性格からして。

結果として、セナの機嫌を損ねて泣かすことになってしまっていたかもしれない。

そしたら、せっかくの遊園地が台無しだ。

「……繭。お前は女神だ」

その慈愛に満ち溢れた、優しき心に乾杯！

もはや完璧すぎて、ぐうの音も出ないぜ。

――ジェットーコースター

セナに急かされ、ジェットコースターを待つ人の列へと並ぶ。

「セナ、大丈夫か？乗れるか？おっそろしいんだぞ、これは。途中で、やーめたと言ってもやめられないからな」

「……そんなに怖いの？」

「ああ。ちなみに俺はガキの頃に乗って泣き散らした」

「それって子供のころでしょ？セナは大人だから大丈夫だもんっ」

あくまでも、子供ではないことに拘るわけね……。

夏休みとはいっても、平日のためか、人だかりは少なかった。

そのため、順番が回ってくるのは、あっという間だった。

適当に席を決め、そこに腰を下ろす。

「本当に大丈夫か？セナ」

「うんっ大丈夫っ」

「ああ、もう引き返せないからな。繭も大丈夫か？」

「……うん。多分」

ガードが降ろされる。

「ついに来るぜ……」

「ついに、ついにだねっ」

セナが興奮して叫ぶ。

ガタガタと動き出す滑車。

「全然スピードなくない？」

「バカ、これからだ。今、急勾配を登っているだろ？頂点に達したとき、一気にガーっとくるんだ。いきなりだからな。覚悟しておけよ」
「え…いきなり……」
と、セナが言いかけたそのとき。
頂点に達した滑車は、目にも留まらぬスピードで急勾配を下り始める。
「きゃあああああぁぁぁぁああ」
セナが叫ぶ。
繭も叫ぶ。
周囲の観客も叫ぶ。
目まぐるしく、コース内を駆け巡る滑車。
「い、いや、いやあああああああああ。とめてとめてとめてえええ」
ひときわ激しく泣き叫ぶ声。
「ほら、だから言っただろ」
風の中で呟き、セナの方を振り返る。
……セナは泣いていなかった。むしろ、この状況を楽しんでいるようにも見えた。
とすると、もしや……。
セナの隣を見る。
その、もしやだった。

泣いていたのはセナではなく、繭だったのだ。

「いやあああ、怖い怖い怖い、いやあああああ」

……案外、怖がりなのな。繭。

ジェットコースターを降りると、繭が涙を啜りながら泣きついてくる。

「……ひぐっひぐっ」

繭のすすり泣く声。

その華奢な体は俺を捕らえ、離さない。

そうすると当然だが、繭の大きな胸が俺の体に密着するわけだ。

「……繭。ずっと、こうしていてもいいんだぜ」

「……うん」

繭の大きな胸は、さらに俺の体を圧迫する。

これが、繭のFカップおっぱいの感触……。

……やば。鼻血が出そうだ。

「な～んか、おにーさん、いっやらしい目つき」

夢心地な気分に浸っていると、セナが余計な横槍を入れてくる。

「誤解されちゃ困るな、セナ。繭が泣いてるから、こうして慰めてあげているんじゃないか」

あくまでも、紳士的に振舞う。

「その割には、目つきがいやらしすぎなの！いやらしいことでも考えてるんじゃないの？」
「そ……それは」
「胸が当たって幸せとか、もっと密着していたいとか」
俺の気持ちを、ことごとく言い当てやがる。
お前はサイコメトラーか！
「へぇ……そんなこと考えてたんだ」
繭の顔色が変わる。
セナの一言により、ようやく気づいたのだろう。見ると、顔を真っ赤にしている。
そして、体をバっと離すと、俺の方を睨みつけ……
「サイテー！この馬鹿！」
ビンタが飛んでくる。宙を舞う鼻血。
「……どうして、俺が」
そしてそのまま大の字になって倒れ、空を仰ぐことになるのであった。

五日目「夢の時間」―4

――お化け屋敷

恐る恐る中へと入る。

「なんか、薄気味悪いよぉ……」

入るやいなや、不安を漏らす繭。

「まあ、そりゃそうだろ。ここはお化け屋敷なんだから。明るかったら気分が出ないだろ？」

「でも……なんか出てきそうで怖い」

「……そりゃ出てくるだろうな。あちらこちらに仕掛けが施されていると思うぜ」

「え…え……？」

そんなこと聞いていないとばかりに狼狽する繭。

「まあ、大丈夫。仕掛けといっても、どうせ機械だ。危害を加えてくるようなことはないから」

「……なら、いいけど」

懐中電灯の光を頼りに暗闇を進む。

相変わらず、繭は終始震えっぱなしだ。

何か仕掛けに遭遇するたびに、悲鳴を上げて俺の体にしがみついてくる。（ただし、今度は胸が当たらないよう工夫して）

見た目の割には、こういうところはとても子供っぽい。

方やセナはというと、一応は悲鳴を上げて怖がってはいるものの、

繭のように心の奥底から怖がっているわけではない。
なんていうか、お化け屋敷というアトラクションをアトラクションとして楽しんでいるようにも見える。

「……セナ」
「うん？」
「お前、案外肝が座ってるんだな」
「え？肝が座ってるってどーいうこと？」
「……いや、何でもない」

二階へ続く階段を上る。

「ねぇねぇ、あれは～？」

セナが指さした先は、なんと白骨死体（人体模型）が！

「繭。見てみろ！死体だ、死体があるぞ！」
「――きゃあああああぁぁぁあああああ！！」

鼓膜が突き破れんばかりの大声で叫ぶ。

「いや、いや、いやあぁぁ……」

その場にしゃがみこみ、顔を両手で覆ってガクガクと体を震わす繭。
……冗談が過ぎた。

「じょ……冗談だよ。あれはただの人体模型だ。どうってことはない」
「……も、もう！からかわないでっ」

階段を上り二階に出ると、果ての見えない廊下が無限回廊のように続いていた。

「……なんか、不気味だな。仕掛けはないのかな？」

前にも何度かこのアトラクションは利用したことがあるが、こんな場所あったっけかな？

……ううむ。

まあ、いい。とりあえず先へ進もう。

歩く。ひたすら歩く。だが、果てはまだ見えそうもない。

「怖い……怖い……」

繭は俺の体を捕らえて離さない。

どうやら、根っからの恐がりのようだ。

「どこまで続いているのかなー？」

セナが歩きながら呟く。

「……なんか妙だよな。普通こんな場所がお化け屋敷にあるか？もしかしたら、道を間違えたのかな？」

「うーん。じゃあ、引き返す？」

「そうだな……そうするか」

と、そのとき。

「きゃああっ」

繭が叫んだ。
「どうした？繭？」
「……あのね、今、胸を触られたの」
……胸を触られた？
「おかしいな。ここには俺ら以外いないはずだぞ？」
「……で、でも、本当に今触られたの！横から白い手が出てきて！」
白い手？
「おにーさんが、こっそり触ったんじゃないのー？」
セナが疑心暗鬼に俺の顔をのぞき込む。
「……バカ言え！俺は今、セナと面向かって話してただろ。繭も見ているよな？」
「……う、うん」
それに、俺は色白ではない。
「とにかく、ここは変だ。急いで引き返そう」
さきほど上ってきた階段の方を目指して走る。
しばらく走り続けていると、繭がまた叫ぶ。
「きゃあああ！」
「どうした、繭！また触られたか？」
「……う、うん。白い手が横から出てきて」

ここで一旦足を止め、状況を整理する。
今もさっきも、繭は『白い手が』と言った。
これは仕掛けか？
……いや、第一、この辺りには仕掛けがありそうなところはない。
とすると、これは……
「……霊の仕業と見て、間違いがないな」
怪奇！繭の胸を触る霊。
「ったく。とんだドスケベな霊だぜ。繭、安心しろ。俺が守るから！」
「う、うん……」
そう言い、俺にしがみついてくる。
1階に降りてからも、同じ事態は何度も起きた。そんなとき、決まって繭は言う。『白い手が横から出てきた』と。
……しっかし、ふてぶてしい霊だぜ。
幽霊という身分を利用して、好き放題触りやがって！クソ！
繭の胸だったら、俺が一番触りたくて触りたくてたまらないというのによ！
……だが、ちょっと待てよ。
これはチャンスかもしれない。
どさくさに紛れて、こっそり繭の胸を触って、それを霊のせいにしてしまえば……。

よっしゃ！

というわけで触る。
むにゅっといった感触。
繭のFカップ爆乳は俺の右手をすっぽりと包み込んだ。

と、そのとき。夢心地に慕っている俺の右手を何者かに捕まれ、我へと帰る。

「やっぱり、あんただったんだ！」
「……ち、違う。これは誤解だ！俺が触ったのは最後の1回だけだ！」
「もう言い訳とか聞かないんだから！最低！この痴漢！」

そう言って、足下の消火器を手に抱えると、それを俺に向け……。

鳴り響く非常ベル。

俺らは外につまみ出された。辺りには消防車のサイレンの音が鳴り渡っている。

「本当に最低ね！あんたって！胸を触ることぐらいしか能がないんだから！」
「……いや、本当に誤解だ！信じてくれ！俺が触ったのは本当に最後の1回だけなんだ！」
「……でも、触ったことは事実でしょ？」
「……う、そ、それは」

返答に困っている俺の肘の裾を、セナが、くいくいと引っ張る。

「ねえねえ。あれ。何か見えるよ？」
セナの指さした先。そこは空だった。
おもわず目を疑う。
なんと、そこに人間の体らしきものが、はっきりと見て取れたのだ。
その体は白く透き通っていて、どこか笑っているようにも見えた。

「……繭。見てみろ。笑っている」
「……うっそ……。こんなことってあるんだ」

目を点にして、それを見つめる繭。

「……ああ。きっとあいつは最後に繭の胸を触ることによって、生前果たし得なかった望みを叶えたんだ」
「……」
「……繭、お前はすごいな。一人の浮かばれない霊を救ったんだぜ」
「満足してくれたのかな……？」
「ああ、きっとそうさ」

消防車のサイレンがけたたましく鳴り響く中、俺らは茜色に染まる空をいつまでも見上げていた。

「これって感動回なの？」
セナが言う。
「ああ。繭の胸が引き起こした奇跡の物語だ」

五日目「夢の時間」―5

トイレから戻ると、慌てふためく繭の姿があった。
涙目になりながら辺りを行ったり来たりしていて、明らかに取り乱している感じだ。
一体、何があったというんだ……？

「セナが、セナが……どうしよう、どうしよう……」

ワケを訊ねると、声を震わせながらそう言った。
そういえば、さっきまで一緒にいたはずのセナの姿が見当たらない。

「落ち着け、繭。セナがいなくなったのか？」
「え、ええ……。ごめんなさい……ちょっと目を離した隙に」

またかよ、セナのやつ……。毎回毎回心配かけさせやがって。

「探そう。まだ、あまり遠くには行っていないはずだ」

◆□◆□◆□◆□◆□

■セナ

「……！」

――突如、襲った感覚。

雑踏の中に、ただならぬ気配を感じた。
……間違いない。ルナは、すぐ近くにいる。

辺りを見渡すと、遠くの方に、風に吹かれて金色の髪が揺れるのが微かに見えた。

「……ごめん、繭！」

一言そう呟くと、その方向めがけて駆け足で進む。

「ルナ、どうしてここに……？」

「あら、ちょっと気になったから見に来ただけよ」

淡々と言い放つルナ。

でもその眼差しは、いつもと違ってどこか羨望に満ちているようにも見えた。

なるほど……分かった。

つまり、こういうことね。

なんだかんだで冷淡ぶっているけど、ルナはセナたちのことが気がかりでしょうがないんだ。

へぇ～、なんだか面白そう。いい機会だから、ちょっと鎌を掛けてみようか。

「とかいいながら、本当はセナたちが羨ましかったんじゃ……？」

少しばかり大げさな口調でそう言い、わざとらしくルナの顔を覗き込む。

「そ……そんなわけじゃ……！」

案の定、必死な形相で食いついてくるルナ。

どうやら、図星をついたようだった。

「じゃあ、どうしてわざわざこんなところまで来ちゃったりするわけ？」

さらに追求を続ける。

「だから、それはあなたたちの様子が見たかったから……」

「また、そのときになったら会いましょうとか言ったくせに、よくそんなこと言えるよねっ」

会心の一撃。

ルナは何も言い返せず、ぷるぷると体を震わせている。

「分かったわよ！正直に言うわよ。……あなたのことが、少し羨ましかった……」

うむ、正直でよろしい。

「じゃあ、一緒に仲間に入る？」

「……今更、そんなことできるはずないじゃない」

「セナは歓迎だよ？」

「……あたしのプライドが許さないのよ！」

「そう……なら、仕方がないね」

背を向け、その場から立ち去るふりをする。きっとルナは引きとめにくるに違いない。

「ま、待って。少し考えさせて！」

そう言って、肩を掴まれる。ほらね。やっぱり。

「その暇もないみたいよ。繭たち、来ちゃった」

◆□◆□◆□◆□◆□

「……セナ、こんなところにいたのかよ」
「もうだめじゃない、セナ。勝手に行ったりしたら」
「えへへ。ごめんっ」
「……ったく」

と、そのとき。ふと視線を感じて隣に目を向けると、セナとちょうど同じくらいの背丈の少女がそこに立っていた。
その少女は、何か言いたげに俺の方を見つめている。

「この子は誰だ？」

セナに訊ねる。

「うーんとね……この子は」

セナがそう言い掛けたそのとき。

「ルナです。いつぞやのときは裏切ってくれて、どうもありがとうございました。あのときの恨み、決して忘れませんから」

ルナと名乗る少女は淡々とそう言い放つと、礼儀正しく俺に向けてお辞儀をした。

「……裏切った？何のことだ？」
「忘れたのなら結構！そんな人ですもんね！元々、あなたは！」

急にそんなことを言われても、何がなんだか分からない。

「なあ。それ、人違いじゃないか？子供に恨み買われるようなことをした覚えはないんだけどな」

「いいえ、あなたに間違いありません！それに、あたし子供じゃありませんから！！」

頬を紅潮させて叫ぶ。

どうやら子供扱いしたことが、さらにルナの怒りをヒートアップさせてしまったようだ。

なるほど、子供扱いされることが気に食わないわけね。

こういうところ、セナにそっくりだな。

「なあ、この子はセナの姉妹かなんかか？」

「うん、まあ、そんな感じかな？」

セナが俺の問いかけに答える。

「なるほど、どうりでよく似ているわけだな」

こうしてよく見てみると、髪の色以外は見分けがつかないほどソックリだ。

「繭、ルナのことは知っているのか？」

「いや……知らない。今日が初対面。それにしても2人とも本当によく似ているね……。双子かな？」

再度、セナの方へ視線を向ける。

「セナ。ルナとは双子なのか？」

「うん、まあ、双子みたいなものかな」
「みたいなものって何だよ」
「まあ、とりあえず今の内は、そういうものだと思っておいてっ！」
俺たちに知られてはまずい関係なのか、妙に歯切れの悪い言葉ではぐらかされる。
「なんだか煮え切らないな……」

◆□◆□◆□◆□◆□

「ルナちゃん。アイスクリームでも食うか？」
「ルナちゃん……。レディーに対して、ちゃん付けで呼ぶとは何ですか！バカにしているんですか！」
何気ない一言でまた怒らせてしまった。気むずかしい子供だな……。
「わ、分かったよ。ルナさん、アイス買ってやろうか？」
「え……ええ。それなら、お願いするわ」

ベンチに腰掛け、他愛のない雑談を交わす。
何気ない日常のひととき。
ふと、日暮れかかった空を見上げてみる。
視界いっぱいに広がる夕焼け空。そして、どこからともなく聞こえてくるカラスの鳴き声。
おかしいな……。一日が終わるのって、こんなにも早かったけかな……。

時間は限られている。
こうしている間にも、刻々と別れのときは差し迫っている。

３日後に訪れる現実を、俺は受け止めることができるのだろうか……。
いや……そもそも俺は、最初からその覚悟なんてできていなかったんではないだろうか。
その現実からずっと目を背け続けてきただけなのではないのだろうか……と、今にして思う。
だって、今があまりにも楽しいから。
やがて訪れる現実を忘れさせてくれるくらいの幸せが、ここにはあるから。

（……！）

と、そのときだった。
突如として、胸の奥が突然痛みだした。
苦しみのあまり、心臓の鼓動の音が激しくなるのを感じる。

（なんなんだよ……！）

これは、今に限ってのことではない。
時折りこんな状態に陥ることがある。
一言で言い表すなら、胸が張り裂けそうな感じだ。

……わけがわからない。
一体何が起きてるというんだよ……。

◆□◆□◆□◆□◆□

夕闇が辺りを覆い始めた。
時刻を確かめると、夜の６時を回っていた。

「もうこんな時間か。そろそろ帰らなきゃな」
「ええ～、もう～？」
まだまだ遊び足りないのか、不満げな様子のセナ。
「ああ。終電がなくなってしまうからな」
「じゃあさ、最後に一つだけ乗りたい！」
「どれだ？」
「あれ！」
セナが指さした先は観覧車。
「よし、分かった。じゃあ行くか！」
「うんっ」
閉園間際ということもあってか、人だかりの列はなかった。
ほとんど待つ必要なく、あっさりと中に通される。
俺と繭、セナとルナ、それぞれ肩を並べ、向かい合って座る。
「綺麗な景色だね～」
セナが窓をのぞき込むと、それにつられて俺と繭も窓の外の光景に目を向ける。
そこには、各所に設置された照明によってライトアップされた夜景が一面に広がっていた。
まるでそれは、一つのイリュージョンを形作るかのように。
「圧巻だなぁ、これは」
地元の俺でさえも、こんな光景、今まで見たことがなかった。

「ルナもこっち来いよ」
ルナの方に目をやると、相変わらず腕組みをしたままで何一つ言葉を発しない。
まるで『あたしはそんなこと興味ありませんよ』とでも言いたげに。
「……なあ、ルナ」
「……なに？」
「せっかくこういう機会なんだからさ……。もっと楽しんだらどうだ？」
「あたし、そういうキャラじゃありませんから」
「あまり無理するなよ。楽しいときは素直に楽しんでもいいんだぜ？」
「別に楽しくないし」
「達観してるんだな。見た目はセナとあまり変わりないのにな」
そういった途端、突如としてルナの表情が殺気じみたものへと変わった。
「じゃあ何ですか！子供は子供らしくしろってことですか！？」
「いや、別にそんなわけじゃないよ。俺が言いたいのは……」
「大きなお世話よ！裏切り者のあなたが偉そうに説教しないで！」
「おいおい……俺がいつお前を裏切ったというんだ？言いがかりはやめてくれ」
「忘れたとは言わせないわ！セナは子供だからまだ覚えていないかもしれないけど、あたしは……」
と、言いかけたそのとき。

「子供って何よ！子供って」

セナが割って入ってくる。
いつものパターンだ。
頬をぷんすか膨らませてルナに食ってかかる。

「あら？本当のことを言っただけよ？」
「む～～～！！」
「ほら、そういうところが子供っぽいの。すぐにムキになって怒っちゃうところが」
「別に、ムキになんてなってないもん！大人なのに、子供扱いされるのか気に食わないの！」
「あなたは、はしゃぎすぎなのよ。やっと念願が叶って自由に歩き回ることができるようになったからって、好奇心の赴くままに行動していたら、そりゃ子供扱いもされるわよ」

……自由に歩き回ることができるようになった？どういうことだ？
そんな話、聞いてないぞ……？

「なによ！ルナったら！そうやっていつもセナのことといじめて！ルナなんて大っ嫌い！」

目から涙をぽろぽろとこぼして、そう言い放つと、そっぽを向いてしまう。

「……ねえ、セナ。どうしていつもそんなに無邪気に笑っていられるの？あたしには理解できないわ。むなしくならない？」
「だって、セナにとっては今が一番楽しいもん。楽しいから、そうしているだけ」
「そう……」

ルナの一言を最後に静まり返る場の空気。

「なあ、どういうことだよ？念願叶って、自由に動き回ることができるようになったって？」

繭が閉じていた口を開く。

「セナ、そろそろ話してもいいんじゃないかな？」

しばしの沈黙の後、セナがこちらに顔を向ける。

「……これから話すこと、信じてくれる？」

「ああ、信じるさ」

そして、語りだす。

あの日、セナの身に起きたことを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4922v/

Sanctuary ～遠くの空～

2011年11月15日22時03分発行